

目次

論文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A 「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる 「単位」について

矢澤 健

The 'Unit' in Miniature Pottery Votive Vessels of the Egyptian Middle Kingdom

Ken YAZAWA

ミニチュア土器は死者や神々に対して、実物の供物の代用品として捧げられていたと考えられており、図像・文字資料に表わされない供物奉獻祭祀の実態を示す重要な考古学的資料である。本稿の目的は、ミニチュア土器の使用における構成や規則性を分析し、その役割をより鮮明にすることである。ファウンデーション・デポジット、墓、葬祭施設などの遺構から、ミニチュア土器の使用におけるセット関係が明確な例を抽出し、その構成や規則性を分析した。その結果、異なるコンテキストであっても、器形や個体数において共通する「単位」が存在していた可能性が示された。その「単位」は、当時の葬送儀礼にある一連の供物奉獻祭祀を象徴していたと考えられる。葬送儀礼の中で示された供物に対応するミニチュア土器の一揃えを用意することが、儀礼としての性格から重要だったと考えられる。

キーワード：古代エジプト、中王国時代、ミニチュア土器、供物、葬送儀礼

The use of miniature vessels is common throughout pharaonic history from the earliest periods onward. It is suggested that miniature vessels were considered magical equivalents of real food offerings for the gods and the deceased. A number of iconographic and textual depictions of offering rituals were attested, but miniature vessels were rarely mentioned. Therefore miniature vessels are important artifacts, because they could shed light on how actual offering activities were performed at ritual places. This paper aims to give a clearer indication of the role of miniature pottery vessels by investigating their composition and regularity in their usage. Specimens were collected from foundation deposits, burial chambers and cult debris of the Middle Kingdom. In order to analyze original assemblages, plundered or disturbed materials were excluded. Analysis showed the presence of a possible "unit", which consisted of similar assemblages in terms of forms and quantities, and this "unit" was present in different contexts. It appears that the "unit" represented a sequence of offering rituals described in traditional mortuary liturgy which was revived under the influence of Middle Kingdom archaism. For miniature vessels to function as a substitute for offerings, a complete set of miniature vessels is necessary, due to the nature of the liturgy.

Key-words: Ancient Egypt, Middle Kingdom, miniature pottery vessels, offering, mortuary liturgy

1. はじめに

古代エジプトにおいて、「ミニチュア土器」は葬送や祭祀に関わる遺構で数多く発見されている。古王国時代や中王国時代では、ファウンデーション・デポジット（定礎具）や墓の副葬品としてもミニチュア土器が使用されており、墓の礼拝施設やピラミッド葬祭殿、祭祀遺跡からは大量のミニチュア土器を主体とする土器集積遺構が発見されている。これらのミニチュア土器は死者や神々に対する供物奉獻において、実物の供物の代用品として捧げられてい

たと考えられている（Allen 2006: 22; Grajetzki 2004: 33）。神々や死者への供物を表した壁画や碑文は数多く残っているが、代用品であるミニチュア土器は表されていない。ミニチュア土器の役割に関する研究例は少ないが、図像や文字資料からは見えてこない、供物奉獻祭祀の実態を示す重要な考古資料と言えるだろう。

ファウンデーション・デポジットや墓の埋葬室ではミニチュア土器が大型の皿や碗の中にまとめて置かれていた例が発見されており、こうした「まとまり」がミニチュア土

器の使用において何らかの意味を持っていたと推測できる。また、墓の礼拝施設やピラミッド葬祭殿で発見されたミニチュア土器の集積も、繰り返し行われた供物奉獻活動の結果であるならば、1回の儀式で用いられた土器のセットはどのようなものだったのだろうか。こうした視点から、本稿では中王国時代のミニチュア土器を対象として、その使用における土器の構成や規則性について分析を行い、ミニチュア土器に与えられた役割についてより深く掘り下げてみたい。

2. 古代エジプトのミニチュア土器

「ミニチュア (Miniature)」は通常、実物をより小さい縮尺で作った「模型」を指す。S. アレン (Allen) は古代エジプトのミニチュアの容器に対する定義として、実物よりも小型に作られているが、容器としての機能は保持しているもの、としている。そのためミニチュアの容器は少量の液体もしくは穀物、果物などの容器として利用することができる。化粧用の壺のように、小型であってもその機能や内容物に見合った大きさで、特に縮小されたものでない場合は、ミニチュアに含まれない (Allen 2006: 21)。本稿で言及する「ミニチュア」は、S. アレンの定義に該当するものである¹⁾。

ミニチュアの容器は供物の代替物と考えられているが、その背景には古代エジプトの葬送や祭祀の場において、実物を象ったもの、もしくはそれを描いた図・文字が、被葬者や神々にとっては実物と同様の働きをするという考えがある。供物そのものや、供物を捧げる行為などを描いた壁画、碑文、模型は、神殿や墓などで数多く発見されている。このような「擬似供物」は墓や棺、ステラ、パピルスに描かれる、もしくは副葬されることによって、永遠に死者や神々に供物を供給し続ける儀式的な装置として働いていた。死者や神々が永遠に供物を得るためには、供物が失われることがあってはならないため、実物よりも朽ちることのない材料で作られた擬似供物の方が、死者に対しては適切だったという見方もある (Pardey 1984: 560-561)。ミニチュアの容器も擬似供物の1つと考えられており、器の外見が重要で、その形状によって供物の内容が示され、実物の供物の代わりとなっていた (Lacovara 1988: 78; Do. Arnold 1999: 493; Allen 2006: 20; Raven 2012: 138-139)。

3. ミニチュア土器研究の現状の概略

ミニチュア容器の利用は先王朝時代からすでに認められている (Swain 1995: 35-37; Lacovara 1988: 77-78)。ミニチュア容器で頻繁に見られる特別な器形は先王朝時代末から初期王朝時代に使用されており、その後王朝時代を通じて変化が見られず、伝統的な形として定着していく。第4

王朝初期から、ミニチュアの石製容器が副葬品として墓に納められるようになった (Junker 1929: 107, 126-129, Pls. XLI, XLIIIe-f; Reisner and Smith 1955: 91)。H. ユンカー (Junker) は約80点の石製容器が棺の傍に置かれ、器形の組み合わせにも一定の傾向が見られることから、これらのセットが古王国時代のレリーフに描かれる「供物リスト」と関係があると推測している (Junker 1929: 108-109)。供物リストは多くの格子状の枠に供物の名前と数が書かれた表形式の供物の一覧で、古王国時代ではステラや墓の祠堂のレリーフ、後に埋葬室にも刻まれるようになった (Barta 1963)。供物リストは被葬者に供物を捧げ、供養の言葉を唱える人が絶えてしまった後も、供物を捧げる儀式の永続を保証するものであった (Do. Arnold 1999: 493; Assmann 2005: 248-249)。

墓にミニチュアの石製容器が副葬されるようになると同時に、葬祭殿や貴族の墓の上部構造でミニチュア土器が大量に使用されるようになった。これらは地上で行われた葬祭活動で用いられたものと考えられている (Rzeuska 2006: 425)。特にメイドゥーム (Meidum)、ダハシュール (Dahshur)、アブ・ロアシュ (Abu Roash)、アブ・グラーブ (Abu Ghurob)、アブ・シール (Abusir)、サッカラ (Saqqara)、ギザ (Giza) など、第4王朝から第6王朝にかけての王の葬祭施設では、膨大な量のミニチュア土器が確認されている (図1)²⁾。

M. バルタ (Barta) は大量のミニチュア土器が生まれた背景について、重要な指摘を行っている。第4王朝における経済の発展と官僚機構の拡大、そして官吏たちの墓の増加によって、前時代のような石製容器を利用した供物奉獻ではなく、より経済的な方法が必要になった。そのため、ミニチュア土器が導入されるようになったと M. バルタは述べている (Barta 1995: 18)。

中王国時代の墓でも、ミニチュア土器の報告例は多数ある。ミニチュア土器が副葬品として頻繁に用いられていた様子は、当時の中心地であったメンフィス・ファイユーム地域に属するリッカ (Riqqa)、ハラガ (Haraga)、ラフーン (Lahun) の墓地出土土器の集成からもうかがい知ることができる (Engelbach 1915, 1923; Petrie et al. 1923)。ミニチュア土器を副葬品として納める行為は、被葬者へ永遠に供物が供給されるようにするためのものであったと考えられている (Grajetzki 2004: 33)。D. アストン (Aston) は、ミニチュア土器の開いた器形については乾燥した食物、パン、果物、野菜を入れ、閉じた器形には液体の供物、つまり水、ビール、ワインなどが注がれていたと推測している (Aston 2004: 251)。

中王国時代のファウンデーション・デポジットにはミニチュア土器が含まれることが一般的である。ファウンデー

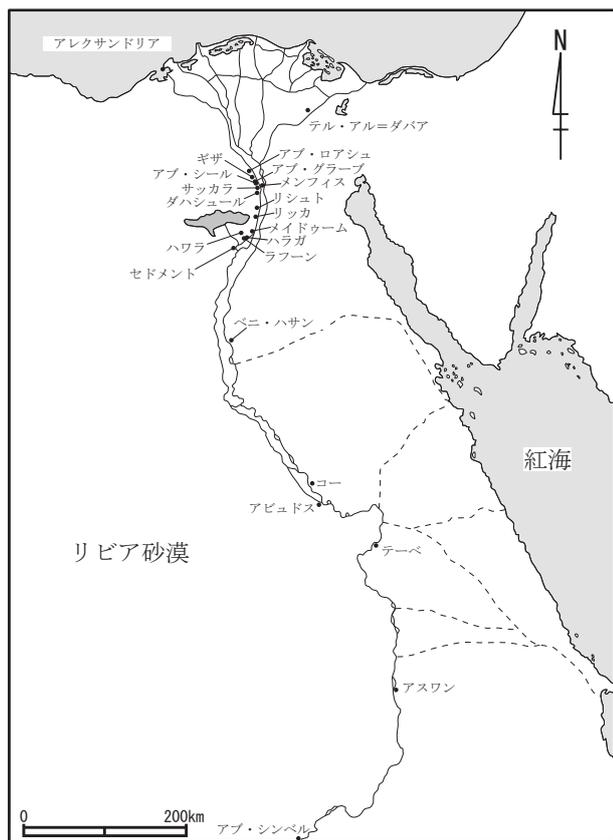


図1 エジプト全図

ション・デポジットは、建築活動を始める前に行われる定礎の儀式の中で、建築物のコーナーにあたる部分、もしくは軸線上に土壌を掘り、そこに儀式に関連する道具や供物を埋納する活動に由来する。王の葬祭殿やピラミッド、マスタバ墓などから発見されている (Weinstein 1973: 57-87)。

中王国時代の葬祭施設では、リシュト (Lisht) のセンウセレット (Senwosret) 1世葬祭殿 (Do. Arnold 1988: 116-117, table 2) やラフーンのセンウセレット2世のピラミッド付近 (Petrie et al. 1923: 11)、アビュドス (Abydos) のセンウセレット3世葬祭殿の正面入口付近の堆積 (Wegner 2000: 111-112, 2007: 254-257)、ダハシュールのアメンエムハト (Amenemhet) 3世葬祭殿の Keramikkomplex 6 (Do. Arnold 1982)、ハワラ (Hawara) のアメンエムハト3世葬祭殿 (Petrie et al. 1912: 33) などミニチュア土器の集積が報告されている。これらの集積に共通する特徴として、土器が密集して出土すること、葬祭殿付近 (主に参道の傍) で発見されていることなどが挙げられる。このような特徴を示す土器群は、日々葬祭殿内で行われていた儀式で使用され、その後廃棄されたものと考えられている (Wegner 2000: 112, 2007: 257; Allen 2006: 22)。

中王国時代のピラミッド葬祭殿の多くは19世紀末から

20世紀初頭にかけて発掘が行われている。報告書ではミニチュア土器が大量に密集して出土したことが記述されるのみであり、器形の詳細や、器形ごとの出現頻度などが報告されていることは稀である。こうした中で、Do. アーノルド (Arnold) によって報告されているダハシュールのアメンエムハト3世葬祭殿の Keramikkomplex 6、および J. ウェグナー (Wegner) によって報告されているアビュドスのセンウセレット3世葬祭殿の儀式で使用された土器の廃棄堆積 (Cult Building Refuse Deposit) が詳細な記録と分析が行われた例として特筆されるべきである (Do. Arnold 1982; Wegner 2000, 2007: 253-285)。これらの報告では、遺跡の複数の地点で検出された土器集積の器形組成を明らかにし、各器形の個体数を調査している。そして各器形の全体に占める割合を算出することで、土器の集積地点に隣接する遺構の特徴を具体的な数値によって明示した。これらの研究は、遺跡の各部分に付随する廃棄堆積が、活動内容によって器形の構成に大きな差が出ることを示している。日々の供物奉獻祭祀に関連する堆積では、ミニチュアを主とする特定の器形が突出して多く、限定された活動が続いていたことが推測されている。アビュドスの場合、葬祭殿の聖域への入口に最も近い正面入口の傍 (参道の脇) で出土した土器群は、86%がミニチュアの平底皿形もしくは碗形³⁾ とビーカー形で占められていた (Wegner 2000: 111-113, Fig. 20, 2007: 254-257, Fig. 108)⁴⁾。2つの器形が突出して高いという特徴は、聖域で供物奉獻祭祀に特化した活動が連続と続いていたことを示している。しかし、これらの報告は土器群を一括で取り扱っているため、活動の概要を把握することはできても、その活動の1回ごとの内容については、踏み込むことができなかった。

4. 分析の目的と対象

本稿では、ミニチュア土器が使用される際の器形の構成とその規則性の検討から、ミニチュア土器に与えられた役割について手掛かりを得ることを目的とする。そのためには、古代エジプト人が供えたミニチュア土器の一式が、欠損無く残されている資料を分析することが望ましい。

そこで、本稿ではまずセットに欠損が少ないと考えられる未攪乱のファウンデーション・デポジットと、未盗掘かもしくは盗掘を受けていても残存状況が良好な墓から出土したミニチュア土器を対象に、そのセットについて分析を行っていきたい。そしてその結果を踏まえながら、地上の葬祭施設で大量に発見されているミニチュア土器群の内容を再検討し、ミニチュア土器のセットに見られる特徴や役割について考察する。

5. ファウンデーション・デポジットのミニチュア土器

定礎の儀式には、王と神が「紐を張る」(*pd ss* “stretching of the code”) 儀式、王が鋤を持ってファウンデーション・トレンチを掘る儀式、王が最初の煉瓦を作る儀式、王が神殿の基礎となる砂を撒く儀式、そして建物の4つの角に金や貴石でできた板を置く儀式があり、その後には建築活動が開始された。定礎の儀式の流れに関する知見はプトレマイオス朝時代のエドフの神殿にあるレリーフを参考にしており、最後の建物の4つの角に金や貴石の板を置くという儀式は、プトレマイオス朝時代より前の文献・図像資料には明記されていない。だが、建物の角に土壌を掘って雄牛などの供物やミニチュアの土器、石製容器を埋納する習慣は古王国時代にはすでに行われていた(Weinstein 1973: 6-16)。

中王国時代のファウンデーション・デポジットは特に王のピラミッドや葬祭に関連する建築物で発見されている。供物として牛や鳥類とミニチュア土器が納められていることが一般的だが、日乾煉瓦や銅または青銅の道具、ビーズなどが加えられることもある。日乾煉瓦の中には銅製または青銅製の板、木製の板、エジプシャン・アラバスター製の板がはめ込まれている例もあり、プトレマイオス朝時代の儀式の記録に類似した要素である(Weinstein 2001: 559-560)。中王国時代になって新しい要素が加えられたが、ミニチュア土器を納める習慣は続けられていた。

デポジットは建築物の基礎となる石材の下に隠されていることが多く、攪乱を受けず埋納時の状態をそのまま留めていることが多い。そのため、埋納された遺物の欠損が少なく、奉納品のセットが確認しやすいことや、出土状況から土器の使われ方を検討しやすいというメリットがある。

ファウンデーション・デポジットのミニチュア土器については、過去に執筆者が別稿でまとめている(矢澤2013)。本稿では、今回の分析に関連する項目のみを既往の研究から抽出し、必要に応じて補足を行う。

以下、ファウンデーション・デポジットの土器の器形組成、個体数、出土状況と内容物などから、そのセットに見られる傾向について分析する。なお、分析対象のファウンデーション・デポジットが発見された建築物は、ほぼ全て王または王族に関連するものである。

①器形組成とその変遷

ファウンデーション・デポジットに含まれていた土器の器形組成とその変遷について図2に概要をまとめた。器形については、開いた器形(Open shape)と閉じた器形(Closed shape)に大別した場合、前者は小型⁵⁾で平底の皿形、碗形が主体でセンウセレット2世までは大きく変わらないが、センウセレット3世以降から半球形の碗が登場する

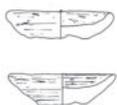
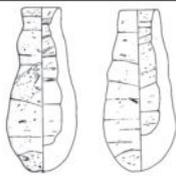
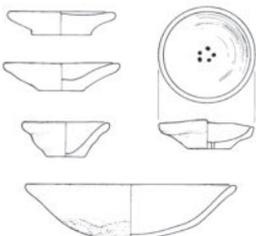
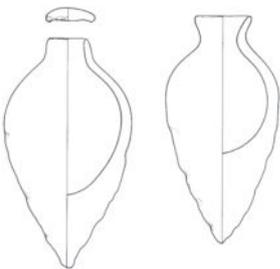
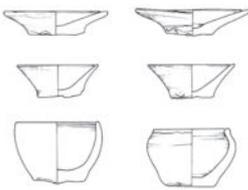
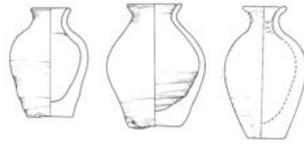
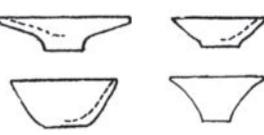
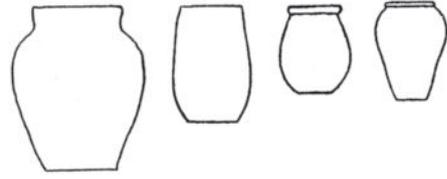
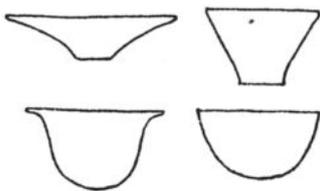
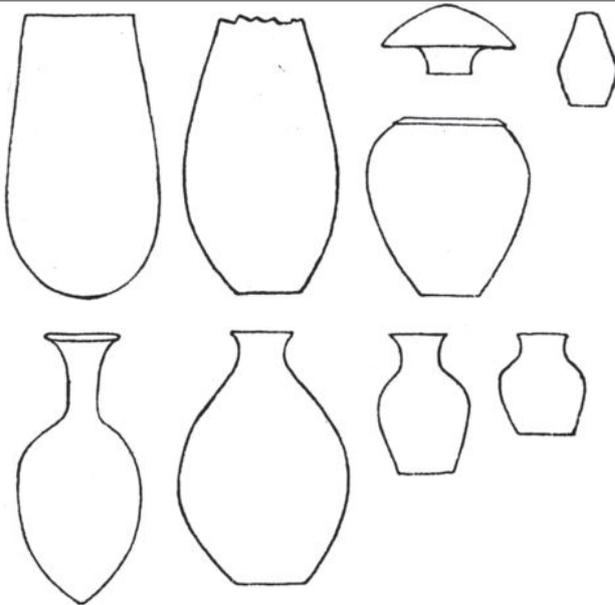
など、変化が見られる。後者の閉じた器形についても時代によって異なり、器形にも様々な種類がある。こうした変遷は、中王国時代における土器様式の発展過程に関連がある。Do. アーノルド(Arnold)によれば、センウセレット1世の治世の後半から、その後の中王国時代で一般的となる新しいスタイルが導入された(Do. Arnold 1988: 145)。その変化に対応して、ファウンデーション・デポジットの閉じた器形も様変わりする。センウセレット1世の治世前半までは尖底、丸底で占められていたが、センウセレット1世の治世後に年代づけられるデポジットでは平底が主体となり、当時の土器様式の変化を反映している⁶⁾。また、開いた器形もしくは閉じた器形のどちらか一方で構成されるようなことはなく、必ず両者が含まれる構成になっていた。

S. アレンはファウンデーション・デポジットの器形の構成が、中王国時代の埋葬で発見された土器群と類似していると述べている(Allen 2009: 322)。センウセレット2世の治世からは器形の種類が増加する傾向があり、同時代の墓から出土する土器の器形との類似が顕著になる。特に、図2の最下端にあるアビュドスのセンウセレット3世王墓周壁南端で発見されたファウンデーション・デポジット(Ayrton et al. 1904: 19, Pl. XXXIX. 17-22)からは、ピラミッド・ウェア(Pyramid Ware)もしくはクイーンズ・ウェア(Queens' Ware)と呼ばれる、王族の埋葬に特徴的な土器群が出土している(以下、ピラミッド・ウェアという表現を用いる)。ピラミッド・ウェアは緻密な胎土を使用し⁷⁾、赤色のスリップが塗布され表面に研磨が施された土器であり、ピラミッド周辺地域の、王宮の監督下にある工房で製作されたと推測されている。ピラミッド・ウェアは、古王国時代から続く伝統的な葬送儀礼に基づく供物容器の様式である(Do. Arnold 1982: 57-58, Abb. 2; Allen 1998, 2009, 2012)。

②個体数

土器の個体数について報告書に記載のあるものを、表1にまとめた。全部で18例あり、平均値が34.3、中央値が32.5である。図3のように、15~19点、20~24点というように5の階級幅⁸⁾でヒストグラムにした場合、全体の83%は25~39の範囲に収まり、30~34点が44.4%で最も多い。アメンエムハト3世のピラミッドの北東コーナーのみ、93点で突出して高い。アメンエムハト3世ピラミッドの例を除けば、30~34の値に収斂していることがうかがえる。

これらの結果から、少なくとも第11王朝のメンチュヘテプ(Mentuhetep)2世から第12王朝のセンウセレット2世の時代にかけては、厳密ではないものの、使用されるミニチュア土器の個体数が一定の値に集約する傾向がある。

	皿形・碗形 (Open shape)	壺形 (Closed shape)
<p>デル・エル＝バハリ メンチュヘテプ 2 世葬祭殿 北東、北西、南東、南西 第 11 王朝末</p> <p>Di. Arnold 1979: 51-57, Pls. 28-32.</p> <p>※実測図は報告されていないが、 大型の丸底皿形 1 もしくは 2 点 含まれている</p>		
<p>リシュト センウセレト 1 世のピラミッド 北西、南東、南西 第 12 王朝初期</p> <p>Do. Arnold 1988: 87-91, 106-109 Figs. 32-38, 52-54, Pls. 60-63.</p>		
<p>リシュト ピラミッド 9 北東、南東 第 12 王朝中期 (アメンエムハト 2 世～ センウセレト 2 世の治世)</p> <p>Di. Arnold 1992: 38-39, 83-89, Figs. 16, 17.</p>		
<p>ラフーン センウセレト 2 世の「セド祭 殿」 北東、南東、南西 第 12 王朝中期 (センウセレト 2 世の治世)</p> <p>Petrie et al. 1923: 18-19.</p>		
<p>アビュドス センウセレト 3 世王墓周壁 南端 第 12 王朝後期 (センウセレト 3 世の治世)</p> <p>Ayrton et al. 1904: 19, Pl. XXXIX.17-22.</p>		

0 20cm

図 2 ファウンデーション・デポジット出土ミニチュア土器の概要

表1 ファウンデーション・デポジット出土ミニチュア土器の個体数

出土遺構	個体数	参考文献
メンチュヘテプ2世葬祭殿北東	32	Di. Arnold 1979, pp.51-52
メンチュヘテプ2世葬祭殿南東	33	Di. Arnold 1979, pp.52-53
メンチュヘテプ2世葬祭殿北西	33	Di. Arnold 1979, pp.53-54
メンチュヘテプ2世葬祭殿南西	35	Di. Arnold 1979, pp.54-56
アメンエムハト1世ピラミッド南西	24	Weinstein 1973, pp.66-67
アメンエムハト1世葬祭殿北東	18	Weinstein 1973, pp.67-69
リシュト、Rehuerdjersenのmastaba	25	Weinstein 1973, pp.69-70
センウセレト1世ピラミッド南東	39	Do. Arnold 1988, pp.106-107
センウセレト1世ピラミッド南西	31	Do. Arnold 1988, pp.107-109
センウセレト1世ピラミッド北西	39	Do. Arnold 1988, p.109
センウセレト1世ピラミッド9北東	30	Di. Arnold 1992, pp.38-39, 83-86
センウセレト1世ピラミッド9南東	33	Di. Arnold 1992, pp.38-39, 86-88
センウセレト2世王妃ピラミッド南東	25	Petrie et al. 1923, p.40
ラフーン mastaba 4北東	25	Petrie et al. 1923, p.10
センウセレト2世セド祭殿南西	32	Petrie et al. 1923, p.18-19
センウセレト2世セド祭殿南東	33	Petrie et al. 1923, p.18-19
センウセレト2世セド祭殿北東	38	Petrie et al. 1923, p.18-19
アメンエムハト3世ピラミッド北東	93	Di. Arnold 1987, pp.17-18
平均値	34.3	
中央値	32.5	

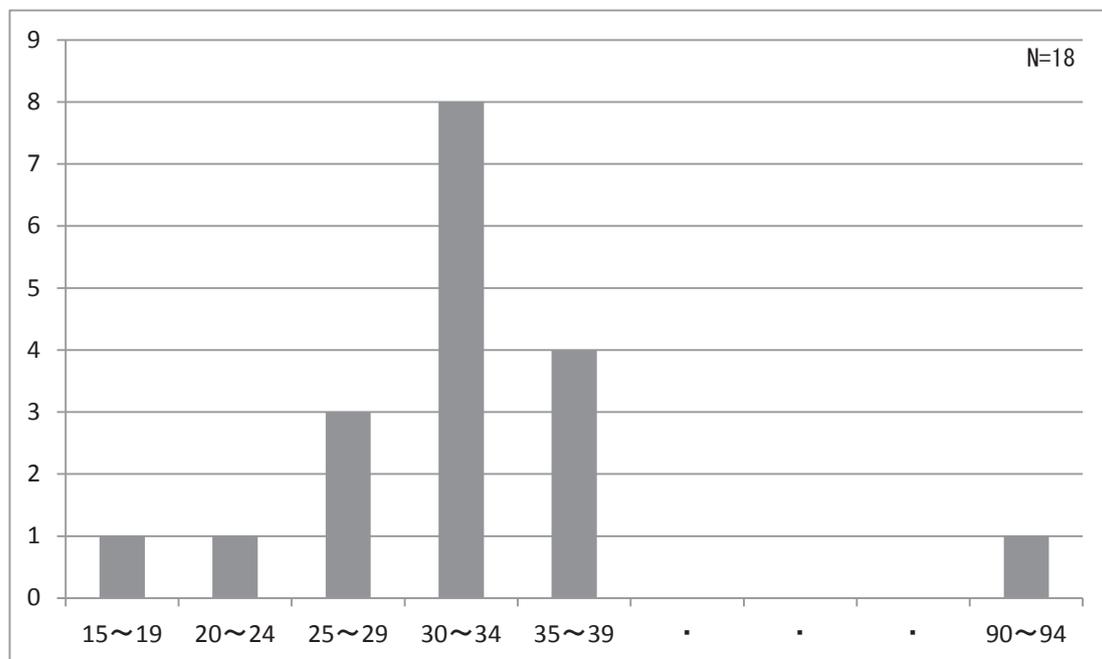


図3 ファウンデーション・デポジット出土土器の個体数のグラフ

アメンエムハト3世の治世のみ突出した数が埋納されているが、その前の王であるセンウセレト3世の時代から第13王朝にかけて、攪乱を受けず出土土器の個体数が記録された資料は今のところ他に報告されていない。そのため、アメンエムハト3世のファウンデーション・デポジットだけが例外なのか、それともアメンエムハト3世の治世前後からそれ以降の時代は同じ傾向なのかについては判別できなかった。この問題については後述する。

土器の個体数そのものに規則性があったわけではなく、ファウンデーション・デポジットが納められた土壌の大きさから、必然的に個体数が近似する可能性についても考慮

してみたい。表2に土壌のサイズと土器の個体数が共に報告書に記載されている例を並べた。土壌の容積を見ると、下は 0.5 m^3 から上は 25.12 m^3 で大きな幅があることが分かる。メンチュヘテプ2世葬祭殿の4つの土壌は容積 0.5 m^3 であり、土器の数は32から35であるが、センウセレト1世のピラミッド南東コーナーは 21.44 m^3 、南西コーナーは 25.12 m^3 と遙かに大きいにもかかわらず、土器の個体数はそれぞれ36、29と大きく変わらない。図2にあるように土器のサイズに大差はなく、その他の遺物についても、雄牛の動物骨、日乾煉瓦などスペースを大きくとるものは両者とも同程度含まれており (Di. Arnold 1979: 51-

表2 ファウンデーション・デポジットのピットの容積と土器の個体数

遺構	土器出土数	報告書に記載された寸法	容積(m ³)
メンチュヘテプ2世葬祭殿北東	32	平面約1m×1m、深さ約0.5m	0.50
メンチュヘテプ2世葬祭殿南東	33	平面約1m×1m、深さ約0.5m	0.50
メンチュヘテプ2世葬祭殿北西	33	平面約1m×1m、深さ約0.5m	0.50
メンチュヘテプ2世葬祭殿南西	35	平面約1m×1m、深さ約0.5m	0.50
センウセレト1世ピラミッド南東	36	直径1.75m、深さ2.23m	21.44
センウセレト1世ピラミッド南西	29	直径2m、深さ2m	25.12
ピラミッド9(リシュト)北東	30	直径0.8m、深さ1m	2.01
ピラミッド9(リシュト)南東	33	直径0.8m、深さ1m	2.01
アメンエムハト3世ピラミッド北東	93	平面約1.5m×1.5m、深さ2.6m	5.85

57, 1988: 87-90)、埋納された遺物群の体積に大きな差は認められない。土器の個体数が93点で他の例より圧倒的に多いアメンエムハト3世ピラミッドの北東コーナーは、容積では5.85 m³で一番大きいセンウセレト1世の例の約4分の1であることから見ても、土器の個体数は土壌の容積の影響を受けていないことが明らかである。

③出土状況と内容物

土器の出土状況で特筆すべきは、メンチュヘテプ2世葬祭殿の基壇で発見された例である。北東、北西、南西、南東コーナーの全てで、大型の丸底皿形土器の上にミニチュア土器が数多く積まれた状態で発見された(Di. Arnold 1979: 51-56, Pls. 28, 29)。このような埋納の仕方は、後述するように墓のミニチュア土器にも認められる。

土器の中には内容物、あるいはその痕跡と考えられるものが報告されている。パン、ナツメヤシ、ブドウ、イチジク、オオムギ(Di. Arnold 1979: 51-57)、黒色の種(Petrie et al. 1923: 40)、小麦粉のようなもの(“what seemed to be flour”)、皮が残存した大きな種を持つ果物、炭化物(Petrie et al. 1923: 19, 30)などがある。また、有機物由来と考えられる付着物が観察された例もある(Petrie et al. 1923: 40)。メンチュヘテプ2世葬祭殿の例では、壺の中に液体が残っていたという記述がある(Di. Arnold 1979: 52)。センウセレト1世ピラミッドのデポジットでは、壺形土器の封が発見されていることや、壺形土器の内部には暗褐色の残滓が付着していたことから、泥状の液体、あるいはビールのようなものが入っていたと推測されている(Di. Arnold 1988: 106-109)。

④ファウンデーション・デポジット出土ミニチュア土器の分析のまとめ

器形の構成は、開いた器形と閉じた器形に大別すると、どちらか一方に偏ることが無く、必ず両者が含まれた構成になっていた。開いた器形は通常固形の供物に、閉じた器形は液体の供物に適しており、両者が揃っていることが必要だったと推測できる。特に閉じた器形については時代によって変化が認められ、センウセレト3世治世頃には、ピ

ラミッド・ウェアと呼ばれる王族の埋葬に特徴的な土器が含まれるようになっており、墓から出土する土器群と類似している。また個体数では、30~34を中心に25~39の範囲に83%が集中するように、奉納される土器の個体数が30~34の値へ収斂する傾向があることがわかった。器形については中王国時代における土器様式の変化の影響を受けて時期によって異なるが、個体数が集約する傾向から、ファウンデーション・デポジットの土器が選ばれる際に、厳格ではないものの、何らかの儀礼に基づいた規則に則っていた可能性がある。

6. 副葬品のミニチュア土器

中王国時代の土器は第12王朝初期のセンウセレト1世治世後半に劇的に変化しており(Do. Arnold 1988: 143-146)、中王国時代に特徴的な副葬用の土器の様式もそれと同時かやや後になって出現し、センウセレト3世からアメンエムハト3世の治世頃にその特徴が明確に表現されるようになった(Allen 2009: 331-332)。第12王朝以降、エジプトの中心地域であったメンフィス・ファイユーム地域の埋葬では、副葬品としてミニチュア土器が頻繁に用いられており、第13王朝に至るまで特に支配層の墓で多く発見されている(Grajetzki 2004: 33)。

墓の多くは盗掘による攪乱を受けているため、土器の埋葬時の状況やセットが明確でないことが多い。また、19世紀末から20世紀初頭に調査が行われている墓が多く、土器の個体数や出土状況まで詳細に報告されているケースは少ない。だが一方で、未盗掘、もしくは盗掘は受けているものの大きな攪乱がなかったため、埋葬時の本来の遺物の配置やセットがわかる形で記録が残された数少ない例外もある。この例外を対象に、埋葬におけるミニチュア土器の使用状況やセットについて見ていきたい。

未盗掘、もしくは攪乱の影響が少ない墓で、ミニチュア土器が出土している例の集成を表3に示した。全部で13例であり、半数は王族の埋葬が占めている⁹⁾。全て中王国時代の王のピラミッドが造営され、当時のエジプトの中心だったメンフィス・ファイユーム地域で発見された埋葬である。時期は第11王朝末~センウセレト1世治世中頃に

年代づけられるヘリシェフヘテブ (Herishefhetep) だけが中王国時代の最初期であり、大半はセンウセト3世治世から第13王朝に年代づけられる。

①器形

この13例の埋葬から出土したミニチュアに類する土器群の代表的な器形を、図4に示した¹⁰⁾。土器群の中には、前述の「ピラミッド・ウエア」が含まれている。既往の研究でピラミッド・ウエアに該当するとされるのは、平底碗形(図4.4、5)、胴部に屈曲を有する丸底壺形(図4.7)および平底壺形(図4.6、8)、短頸平底壺形(図4.11、12)、平底ピーカー形(図4.17)、狭口丸底壺形(図4.18)、口縁が外反する広口平底壺形(図4.20)、口縁が外反する広口丸底壺形(図4.23)である。

ピラミッド・ウエアにある器形の起源は古く、初期王朝時代の葬送の儀式や供物奉獻で用いられた容器の形であった。その伝統は古王国時代に受け継がれ、葬送儀礼の供物容器として定型化され、壁画や供物卓、ステラ、棺の側面などに繰り返し描かれた。中王国時代のピラミッド・ウエアはその模倣と考えられている。S. アレンは実際に、古王国時代第4王朝のヘテブヘレス (Hetepheres) 墓から発見された土器群とダハシュールで発見されたピラミッド・ウエアを対比させ、両者が極めて類似していることを例示した (Allen 2009: 330-332, Fig. 11)。初期王朝時代や古王国時代で発見されている同種の器形はより大型であり、中王国時代のもはそれらを模倣し、かつより小型になっている。前述の定義に基づけば、ピラミッド・ウエアもミニチュア土器の範疇に含まれる。

いくつかの器形の中には、葬送の儀式に関する壁画や碑文資料などで頻出し、名前が明らかになっているものもある。G. ジェキエ (Jéquier) は中王国時代のオブジェクト・フリーズと呼ばれる棺に描かれた図像の研究の中で、いくつかの容器の名称を特定している (Jéquier 1921: 308-315)。それらは *dšrt*、*nmst*、*snw* と呼ばれている容器で、その図像が中王国時代の墓から出土する土器の器形と類似していることを S. アレンは示した (Allen 2009: 331-332, Fig. 12)。S. アレンによる図像と実際の土器との対応を参照すると、*dšrt* は外面が赤色で断面台形を呈する平底碗形と、胴部が屈曲する壺形の2種類があり、図4の例では前者が図4.4、5、後者は図4.6~8が該当する。図4.9、10は胴部の屈曲が見られないが、口縁の形状や、胴の中部で径が最大になっていることから、*dšrt* に該当する可能性がある。*nmst* は平底・広口で口縁が外反する壺であり、図4.19、20が該当する。*snw* は無頸、平底で肩が張っている器形、もしくは平底で口縁部がやや狭くなるピーカー形であり、前者は図4.15、16、後者は図4.17が

対応する¹¹⁾。そのほか、図4.12、13はいわゆる *hs* 壺 (*Hes Jar*) であり、儀式での献水に用いられるもので、本来は銅製や銀製であるが、土器によるミニチュアも副葬品として納められることが知られている (Do. Arnold 1984: 216)。ミニチュア土器だけでなく、ネフェルウプタハ (Nefertah) 墓では銀製の *hs* 壺が2点 (Farag and Iskander 1971: 13-17, Figs. 8, 9)、アウブラー・ホル (Aubre Hor) 王墓では木製の模型が1点出土している (Morgan 1895: 97, Fig. 226)。

dšrt、*nmst*、*snw* は供物リストの中で、供物や清めの水を入れるための容器として登場する (Barta 1963)。古王国時代の葬送と強い関連のあるピラミッド・ウエアの存在や、供物リストで言及される器形が用いられることは、古王国時代に確立した葬送儀礼が中王国時代でも模倣されていたということであり、伝統を積極的に復古しようとする当時の傾向が背景にあると考えられている (Allen 2009: 332-335)。

ただし、どの埋葬においても必ず *dšrt*、*nmst*、*snw*、*hs* などの器形が含まれていたわけではない。本稿で挙げた13例の中で、報告書の中で発見された全ての器形が確認できるのはヘリシェフヘテブ、ネフェルウプタハ、セネブティシ (Senebtisi)、ダハシュール北遺跡シャフト65 (セベクハト (Sebekhat) とセネイトエス (Senetites))、ダハシュール北遺跡シャフト53だけである。近年調査が進みつつあるウエレットII (Weret II)、サトハトホル (Sithathor)、サトウエルト (Sitwerut) などのダハシュールの王族の埋葬については、いくつかの論文でまばらに報告されているものの、その全体の構成については明確にされていない。少なくとも現在提示されている情報からわかることは、ウエレットII、サトハトホル、サトウエルト、ネフェルウプタハ、セネブティシ¹²⁾ など、王族もしくは高位の人物の埋葬については、*dšrt*、*nmst*、*snw*、*hs* などの、伝統的な葬送儀礼を反映した器形のほとんどが含まれている。一方、ヘリシェフヘテブやダハシュール北遺跡のシャフト65 (セベクハトとセネイトエス) の埋葬では、小型の皿形土器のみで占められている。ヘリシェフヘテブやダハシュールのシャフト65は、その他の副葬品の構成をみても高位の人物の埋葬とは言えないため、被葬者の階層によってミニチュア土器の構成が異なっていた可能性がある。

②出土状況と内容物

次にミニチュア土器の出土状況であるが、大型丸底の皿形土器の上に、積み重ねられた状態で出土している例が多く、ヘリシェフヘテブ、イタ (Ita)、ネフェルウプタハ、セネブティシ、ヌブヘテプティ (Nubhetepiti)、ダハ

表3 未盗掘もしくは攪乱の影響が少ない墓のミニチュア土器

被葬者	出土地	時代	出土状況	参考文献
ヘリシェフヘテブ (Herishefhetep)	アブ・シール ニウセルラー王の ピラミッド東	11王朝末～ センウセレト1世中頃	未盗掘、ミニチュア皿形土器16点が大型丸底皿形土器の中に入れられ、被葬者の棺の東側、頭部付近に置かれていた。土器の全個体数は不明。	Schäfer 1908, pp.82-88, Abb.136.
イタ (Ita)	ダハシュール アメンエムハト2世の ピラミッド複合体内	アメンエムハト2世以降	未盗掘、棺が置かれた埋葬室の東側に面する部屋の北部で、大型丸底皿形土器の上にミニチュア土器が積まれた状態で発見された。出土状況の図では壺形が主体のように見えるが、器形の詳細は記述されていない。土器の全個体数は報告書の記述から44点。	de Morgan 1903, p.40-55, Fig.105.
ウエレトII (Weret II)	ダハシュール センウセレト3世の ピラミッド複合体、 Pyramid 9	センウセレト3世	盗掘による攪乱を受けていたが、埋葬室の南側にある付属室で出土した大型の丸底皿形土器の上に暗色の円が残っており、同じ部屋から発見された小型の平底碗形土器と径が完全に一致することから小型の碗が大皿の上に重ねられていたと推測されている。付属室で発見された小型の碗は全部で37点。埋葬室も含めた全体の土器個体数は最小で260、その内218点が小型の平底碗形だった。	Allen 1998, pp.44-45, Fig.3; Allen 2009, p.327.
サトハトホル (Sithathor)	ダハシュール センウセレト3世の ピラミッド複合体、 Tomb 9	アメンエムハト3世	盗掘を受けていたが、土器は被葬者の石棺の東側、石棺の北側面の位置から南へ75cmのところまでとまって出土した。土器群は天井の崩落による堆積に埋まっていた。中型の高台付碗が、平底もしくは丸底のミニチュア皿で埋められていた。60点の土器が発見され、そのほとんどは碗形であり、残りは壺形であった。碗形はいくつかの山 (several stacks) になって発見された。埋葬室から発見された土器の全個体数は不明。	Allen 1998, pp.40-44, Fig.2; Di. Arnold 2002, p.73, Pl.69.
不明	ダハシュール センウセレト3世の ピラミッド複合体、 Tomb 11	アメンエムハト3世	上記 Tomb 9 と同様の供物が石棺と埋葬室東壁との間の空間の、北辺から発見されたという記述があり、報告書の Pl.69 には「Pottery Deposit」と記載されている。	Di. Arnold 2002, p.74, Pl.69.
サトウェルト (Sitwerut)	ダハシュール センウセレト3世の ピラミッド北、 Mastaba 31	アメンエムハト3世	未盗掘、Senebtisi 墓と同様にL字型を呈しており、埋葬室の北側にある角の部分が前室になっている。土器群は前室で発見された。出土状況の詳細はまだ報告されていないが、土器は全部で168点、内12点は住居址でも見られる器形、156点は埋葬に特徴的な器形だった。	Allen 2009, p.327; Di. Arnold 1996.
ネフェルウプタハ (Neferuptah)	ハワラ アメンエムハト3世の ピラミッド南東2km	アメンエムハト4世～ 第13王朝初期	未盗掘、埋葬室が石灰岩ブロックによって仕切られており、仕切の南側に石棺、北側に供物卓があり、59個体のミニチュア土器が発見されており、供物卓上に置かれた大型丸底皿(割れていた)の上、供物卓の上、供物卓の周囲に散らばっていた。	Farag and Iskander 1971, pp.10-11, Pls.X, XIII.
セベクハト (Sebekhat) セネトイトエス (Senetites)	ダハシュール北遺跡 Shaft 65	第12王朝後半	未盗掘、南(A室)と北(B室)にそれぞれ埋葬があるシャフト墓で、南のA室では部屋の入口付近にミニチュア皿2点、棺東側面のアイパネル付近ミニチュア皿7点と中型丸底皿1点が折り重なるように発見された。北のB室ではミニチュア皿12点が東側面の入口近く、ミニチュア皿2点が部屋の西奥に置かれていた。南北とも東側にあったミニチュア皿には内容物が認められた。	吉村他 2010, pp.18-22, 図 22.
セネプティシ (Senebtisi)	リシュト アメンエムハト1世の ピラミッド南東、 センウセレトの マスタバ内のシャフト	アメンエムハト3世以降	盗掘を受けていたが、土器の出土状況が記録されており、土器の本来の埋納状況が推測されている。全部で206個体の土器が被葬者の棺の南側(埋葬室の入口側)で密集して発見された。大型丸底の皿形土器の1つにはミニチュアの皿形土器が積まれていた。	Mace and Winlock 1916, p.112, Fig.1, 82, Pls.XXXIV, XXXV.c.
アウイブラー・ホル (Auihre Hor)	ダハシュール アメンエムハト3世の ピラミッド北側の シャフト	第13王朝	未盗掘、被葬者の棺の北側にある、被葬者の「カー」の姿を現した等身大彫像を入れた祠堂の北側、西側と、祠堂の中から粗製の小型の土器が多数発見された。器形の詳細・個体数については不明。	de Morgan 1895, pp.91-98, Fig.211.
ヌブヘテプティ (Nubhetepiti)	ダハシュール アメンエムハト3世の ピラミッド北側の シャフト、 Auihre Hor の西隣	第13王朝 (アウイブラー・ホル王と 同時期)	未盗掘、被葬者の北東側で、ミニチュア土器が2つの大型皿形土器に積まれていた。Fig.252にはその1つの拡大があり、皿形は確認できるが、それ以外の器形があったかは不明。ミニチュア皿形土器の上には内容物があつたようだが、詳細については記述されていない。土器の個体数は不明。	de Morgan 1895, pp.107-117, Figs.250-252.
不明	ダハシュール北遺跡 Shaft 53	第13王朝中期	盗掘による攪乱を受けていたが、A室(南側)の開口部、東壁際には床面に近い位置で大型の丸底皿が出土し、その上、および周囲の堆積からミニチュア土器が出土した。平底皿形15点、平底広口壺形6点、無形平底壺形6点。	吉村他 2011, p.35, Fig.17.
不明	ハラガ cemetery A Tomb 128	中王国時代後期	未盗掘に近いが、棺は盗掘者によって開けられた可能性がある。棺の北側でミニチュアの平底皿形と無頸平底壺形がまとまった状態で出土した。土器の個体数についての記述はない。	Engelbach 1923, p.16, Pl.XIII. 7; Grajetzki 2004, pp.34-35.

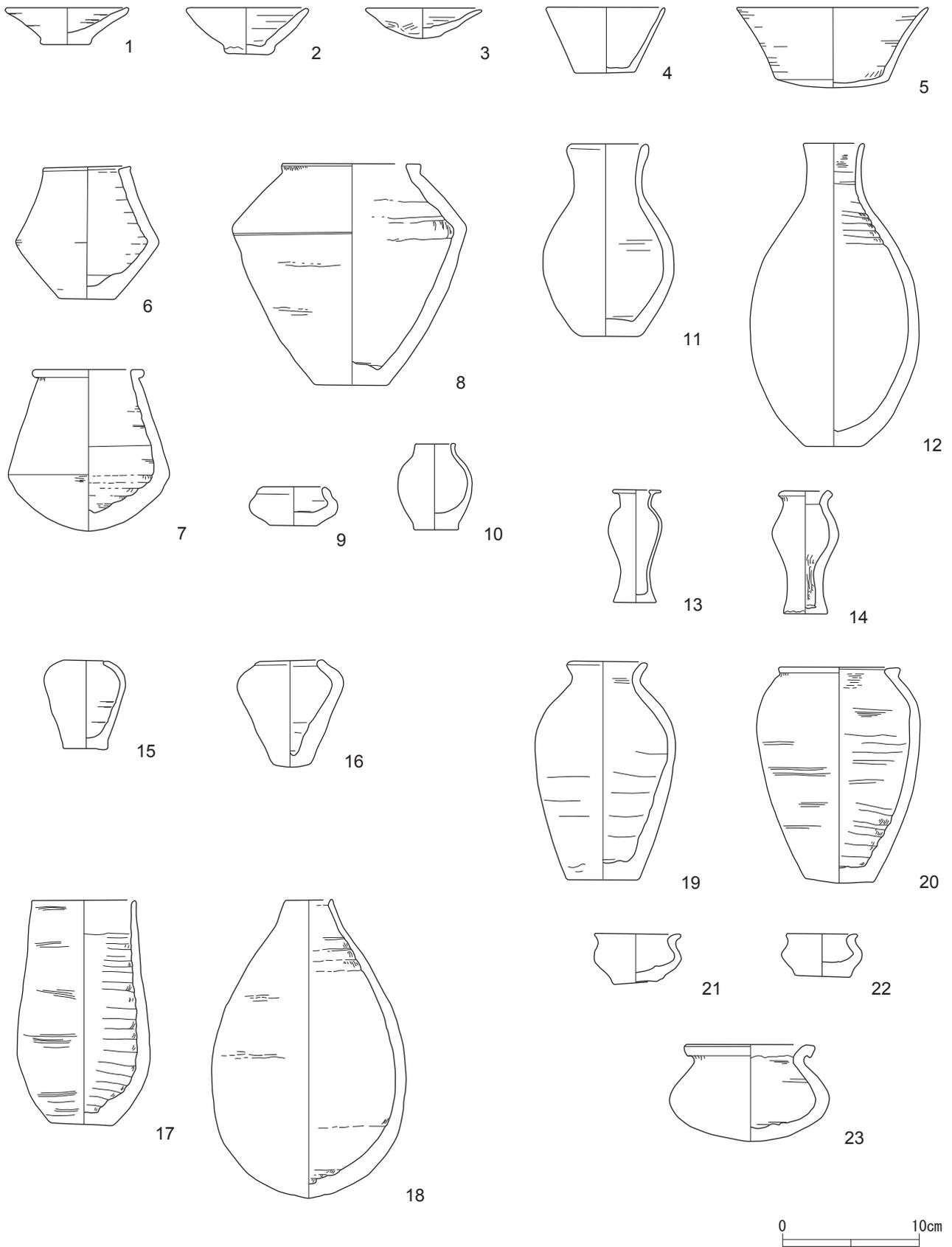


図4 副葬品のミニチュア土器の代表的な器形

シュール北遺跡シャフト 53 が該当する。また、ダハシュールのセンウセレト 3 世のピラミッド複合体の一部である王妃ウエレト II の墓 (Pyramid 9 の地下室) では、盗掘者による攪乱を受けていたが、埋葬室の付属室で出土した大型の丸底壺形土器の上に暗色の円の跡が残っており、同じ部屋から出土した小型の平底碗の口径と円の径が一致することから、碗が大皿の上に積み重ねられていたと推測されている (Allen 1998: 44)。同じくセンウセレト 3 世のピラミッド複合体のサトハトホル墓では、大型の台付碗形土器の中に、ミニチュア土器が一杯に詰められていたと報告されている。また、碗形の土器がいくつかの山 (several stack) になって発見された (Allen 1998: 44, Figs. 2. 9-11; Allen 2000: 43, Fig. 1)。ハワラのネフェルウプタハの埋葬では、供物卓の上に大型の丸底皿が割れた状態で発見されており、ミニチュア土器は大皿の上に載せられていたものと、供物卓の上に直接載せられていたもの、供物卓の周囲に散らばっていたものがあつた (Farak and Iskander 1971: 10-11)。

大型の皿形・碗形土器の上 (または中) にミニチュア土器を積み重ねるという行為は、前述のファウンデーション・デポジットでも認められており、埋葬の場合でも、ミニチュア土器を何らかの「まとまり」として意識していた可能性を示している。大皿の上に載せられてはいないが、土器群が何か所にまとめられていたことが記録から確かな例もあつた (ダハシュール・センウセレト 3 世ピラミッド複合体 Tomb 11、ハラガ Tomb 128)。

ミニチュア土器の中から、内容物が発見された例もあつた。ダハシュール北遺跡のシャフト 65 は、セベクハトとセネイトエスの 2 人が埋葬されたシャフト墓であり、両者の棺の東側に置かれていたミニチュア土器には何らかの植物が置かれていた (吉村他 2010: 19-22)。ヌブヘテプティ墓でも、報告書の記述の中では言及されていないが、大皿の上に多数のミニチュア皿形土器が積まれた出土状況を示した図 (de Morgan 1895: Fig. 252) には、何らかの内容物がミニチュア皿の上に入れられていた様子が描かれている。少量の内容物の存在は、前述のファウンデーション・デポジットでも確認されていた。

ミニチュア土器の出土位置についても、一定の傾向が認められた。全 13 例のうち、約半数の 6 例が被葬者の東側に位置しており、4 例が北側、南側が 2 例、北と東の 2 カ所に分かれていたものが 1 例である。中王国時代の埋葬習慣では、被葬者は体を伸ばした状態で頭を北に向け、左側面を下にして体の正面が東を向くように埋葬されることが一般的である。当時の墓において東は供物卓のある方向であり、同時に東の地平線、すなわち太陽が日々昇る方向だった。中王国時代の棺の東を向く面の外側、ちょうど顔

の前にあたる部分には、被葬者が供物や昇る太陽を見ることができるように対の目が描かれていた¹³⁾。棺の東側板の頭部側内面もしくは外面のアイパネル (一對の目の装飾) 下には偽扉が描かれている例があり、死者の靈魂「バー」が棺の中と外を行き来できるようにするためのものだったと考えられている (Bourriau 1988: 89; Willems 1988: 47)。

J.-L. ポドゥヴァン (Podvin) は中王国時代の未盗掘墓から発見された副葬品の位置関係の分析から、その配置には明らかな傾向があり、実用的な理由ではなく、儀式的な理由によって位置が決められていたと述べている (Podvin 2000: 294-295)。棺の東側は被葬者の視線の先にあたり、被葬者の来世での永続にとって重要なものが置かれる。ヘリシェフヘテプ墓、イタ墓、サトハトホル墓、ダハシュール Tomb 11、ヌブヘテプティ墓、ダハシュール北遺跡シャフト 53 はいずれも被葬者の東側、頭部の前にくる位置にミニチュア土器がおかれていた。ダハシュール北遺跡のシャフト 65 の埋葬室は比較的小さいため、棺が入られた状態だとそれ以外の副葬品を入れるスペースはほとんどなく、ミニチュア土器は棺の北側と東側に分けて置かれていた。棺と埋葬室東壁にはごくわずかなスペースしかないにも関わらず、多くのミニチュア土器を詰めて入れていた状況が観察されており、被葬者の東側にミニチュア土器をまとめて配することに重要な意味があつたことがうかがえる。

③ 個体数

次にミニチュア土器の個体数について述べる。ヘリシェフヘテプ墓では皿形のミニチュア土器が 16 点発見された。イタ墓では全部で 44 点が報告されているが、ミニチュアに該当する土器の個体数は明確ではない。ウエレト II の墓では全部で 260 点発見されており、その内 218 点が小型の平底碗形 (図 4. 4、5 に該当する器形) だった¹⁴⁾。サトハトホル墓では 60 点の土器が何か所から出土しており、碗形の土器がほとんどだったと記述があるが、その他の場所から出土した土器を含めた全個体数については明確に記されていない。サトウエルト墓では全部で 168 点、その内埋葬に特徴的な土器群は 156 点という報告があるが、ミニチュア土器の個体数は不明である。ネフェルウプタハ墓からは全部で 68 点の土器が出土しており、その内 59 点がミニチュア土器だった。ダハシュール北遺跡のシャフト 65 では、A 室が 9 点、B 室が 14 点であり、合計 23 点、それ以外は中型平底皿形が 1 点、大型丸底壺形の下半部が 1 点であった。セネブティシ墓では全部で 206 点の土器が出土しており、ミニチュア土器に該当するものは 176 点だった。ダハシュール北遺跡のシャフト 53 では全部で 34

点出土しており、ミニチュア土器に該当する土器は27点であった。

以上、少ない例であるが、出土土器の全個体数の中で、ミニチュア土器が多くを占めていたことが分かる。また、個体数を見る限り、ファウンデーション・デポジットに見られたような統一性は認められなかった。S. アレンによる中王国時代の副葬土器の研究によると、王族の埋葬については、センウセレト3世治世頃から副葬される土器の個体数が多くなっている (Allen 1998: 44)。

しかし、S. アレンは別稿で、王族の埋葬で数多く発見される土器群が、ある一定の小さなグループの「繰り返し」であった可能性を指摘している (Allen 2009: 335)。このような視点から本稿で取り上げた例を見てみると (図5)、ヌブヘテプティ墓の発見時の状況ではミニチュア土器の一群が2つの大皿に分けて載せられていた (de Morgan 1895: Fig. 250)。その西側で発見された8点の土器は、実測図という形では記録されていないが、細密なスケッチが報告書に掲載されている (de Morgan 1895: Fig. 251)¹⁵⁾。この中で図5. 1~4は *dsrt* 形で4点、図5. 5, 6は *nmst* 形で2点、図5. 7, 8は *snw* 形で2点であり、全て2で割り切れる数字になっている。つまり、これらの土器群は大皿に載せられたミニチュア土器群1グループと、*dsrt* 形2点、*nmst* 形1点、*snw* 形1点で1つのセットになっており、そのセットが2つあると考えることができる。ネフェルウプタハ墓の例では59点のミニチュア土器が発見されており、代表的な器形の実測図が掲載されているが、器形ごとの個体数については記述されていない。しかし、出土したミニチュア土器全点を収めた写真が掲載されており (Frag and Iskander 1971: Pl. X.A)、特徴的な器形についてはその個体数を明らかにすることができる。小型の平底皿形、平底碗形については写真の角度からは判別がつかないが、それよりやや径の大きい平底皿形は4点あることがわかり、*hs* 形は2点、*snw* 形は2点、*dsrt* に似ているが胴部の屈曲が無い平底壺形の土器は2点、広口の平底壺形はおそらく6点あり、こちらも2で割り切れる個体数である。つまり、ミニチュアの土器群が2つのセットで構成されている可能性を示しており、その場合、1つのセットは約30点となる。特定の器形の個体数が2または4によって割り切れることは、セネブティシ墓出土の土器についても指摘されている (Grajetzki 2014: 33)。

④副葬品のミニチュア土器のまとめ

以上、墓で副葬品として納められたミニチュア土器の器形、出土状況と内容物、個体数について見てきた。王族や高位の人物の埋葬では、ピラミッド・ウェアや *dsrt*、*nmst*、*snw* 形の容器を象った器形が存在するなど、古王国

時代から受け継がれた伝統的な葬送の供物奉獻儀礼との関連を示していた。また、大型の皿もしくは碗の中にミニチュア土器を積み重ねている例が複数見られることや、一箇所にまとめて置かれていることなど、ミニチュア土器を一定の「まとめり」として意識し、使用していたことがうかがわれた。被葬者の頭部付近、特に当時の埋葬習慣では象徴的に重要な東側にミニチュア土器がまとめられた形で配置されるという状況は、当時の葬送儀礼におけるミニチュア土器の重要性を伝えている。

こうした「まとめり」の傾向が認められる一方で、土器の個体数については、ファウンデーション・デポジットの分析で見られたような統一性は認められなかった。しかし、S. アレンは、埋葬で発見される土器群がある一定のセットの繰り返しであった可能性を指摘しており、実際にヌブヘテプティ墓、ネフェルウプタハ墓の例では、土器のセットが同じ構成を持つ単位に2分割できることを本稿で示した。ネフェルウプタハ墓の例では1つの単位が約30点となり、ファウンデーション・デポジットでの平均個体数に近似しているという点で興味深い。

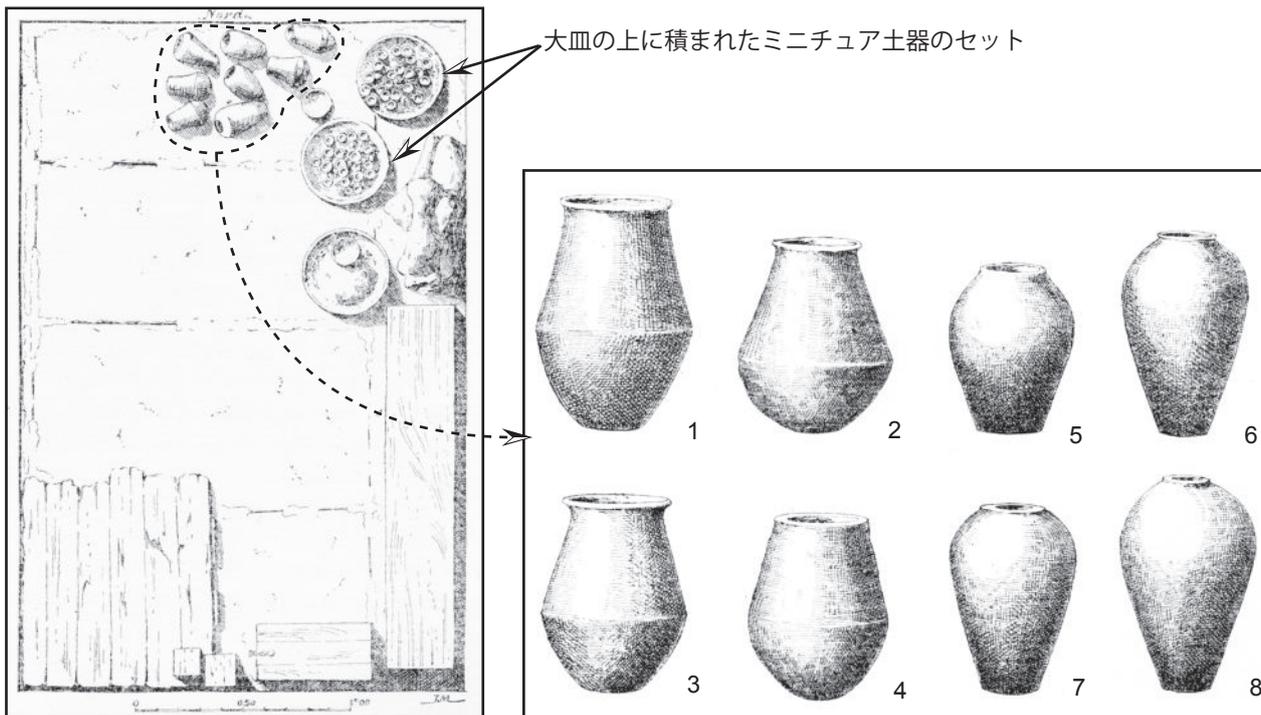
以上から、副葬品のミニチュア土器の使用には特定の「単位」が存在し、多数の土器群が認められる場合もこの「単位」の集合であった可能性がある。そしてこの「単位」は、少なくとも王族の埋葬にはピラミッド・ウェアや *dsrt*、*nmst*、*snw*、*hs* 形の容器が存在していることから、古王国時代の伝統的な供物奉獻の儀礼を意識したものであった。決められた儀式や呪文を繰り返すことは儀礼行為の顕著な特徴であり、古代エジプトの儀式に関する文字資料の中に2回または4回同じ呪文を唱えるように書かれた例は、ピラミッド・テキストをはじめ随所に見られる (Meyer-Dietrich 2010: 2)。ミニチュア土器のセットが供物奉獻儀礼そのものの象徴として墓に納められていたのならば、「繰り返し」の特徴があったとしても不思議ではない。

7. 地上の葬祭施設におけるミニチュア土器

ファウンデーション・デポジットと副葬品のミニチュア土器の分析結果から、器形の構成、個体数に「単位」と呼べるようなセットが存在する可能性を指摘してきた。次に、これまでの分析結果を参照しながら、地上の葬祭施設から出土したミニチュア土器群について見ていきたい。

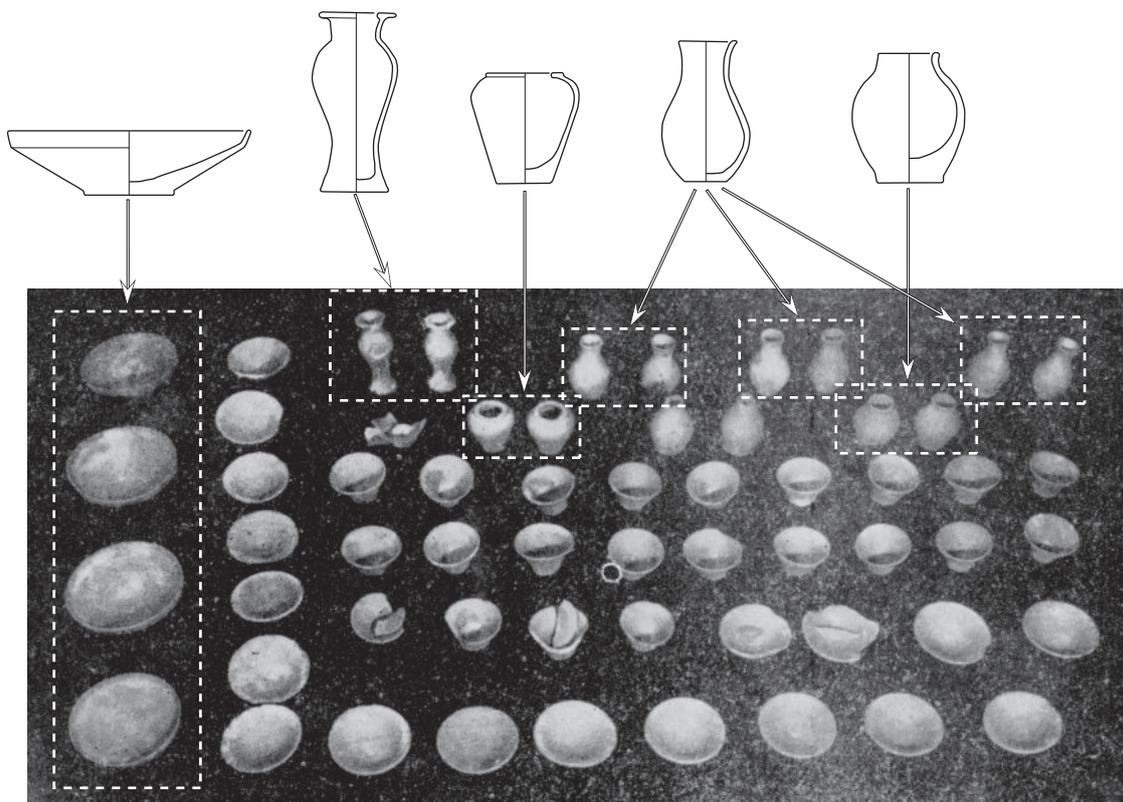
中王国時代の王の葬祭殿で、葬祭活動に由来する堆積から発見されたミニチュア土器の例を図6に示した¹⁶⁾。

図6. 1~6はリシュトのセンウセレト1世ピラミッド葬祭殿にある、「Brick Chamber Basin」の堆積上層 (stratum 2) で発見されたミニチュア土器群である。この堆積層はミニチュア土器が多数を占めることから、葬祭殿にお



ヌブヘテプティ墓の発見時の状況
(de Morgan 1895: Fig.250 に追記)

ヌブヘテプティ墓出土土器の一部 (ピラミッド・ウェア)
(de Morgan 1895: Fig.251 より)



ネフェルウプタハ墓出土土器
(Farag and Iskander 1971: Pl.X.A, XIII に追記)

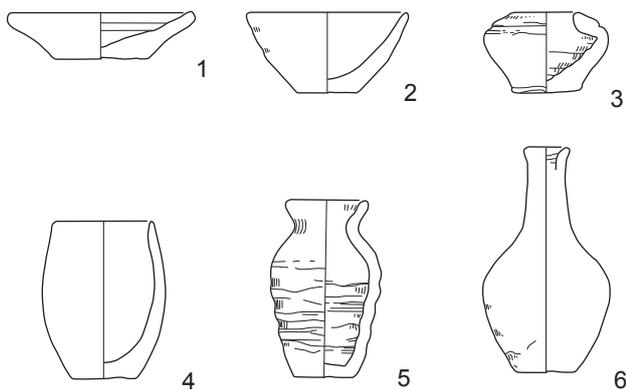
図5 中王国時代の埋葬に見られるミニチュア土器の「繰り返し」

ける祭祀活動に由来すると考えられている (Arnold 1988: 116, Table 2)。特筆すべきは、*snw* 形と思われる器形 (図 6. 3)、*nmst* 形と思われる器形 (図 6. 5) の存在であり、また平底皿形 (図 6. 1)、平底碗形 (図 6. 2)、平底ピーカー形 (図 6. 4) は図 2 に示したファウンデーション・デポジットや、図 4 に示した埋葬におけるミニチュア土器にも同種のものがある。

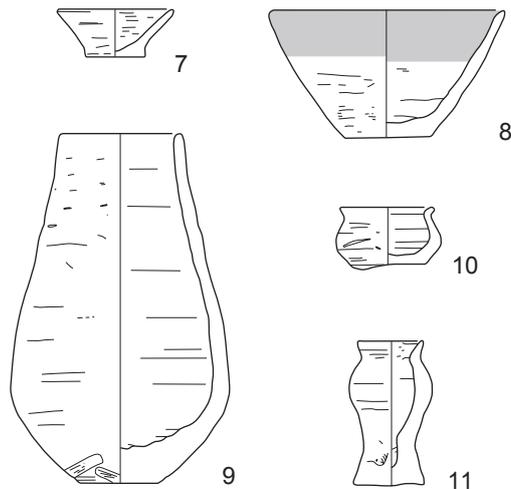
図 6. 7~11 は、ダハシュールのセンウセルト 3 世の葬祭殿で、第 13 王朝に至るまで行われていた葬祭活動に関連する堆積の土器群についての概要報告を参照したもので

ある (Allen 2000: 44-45, Fig. 4)。図 6. 8 は断面が台形状を呈する平底の碗形であり、上半分に赤色スリップが塗られていた。表面調整や胎土の質については図 4. 4、5 のピラミッド・ウェアとは異なるが¹⁷⁾、形状が似通っている。図 6. 10 は *nmst* 形、図 6. 11 は *hs* 形に該当すると考えられる。

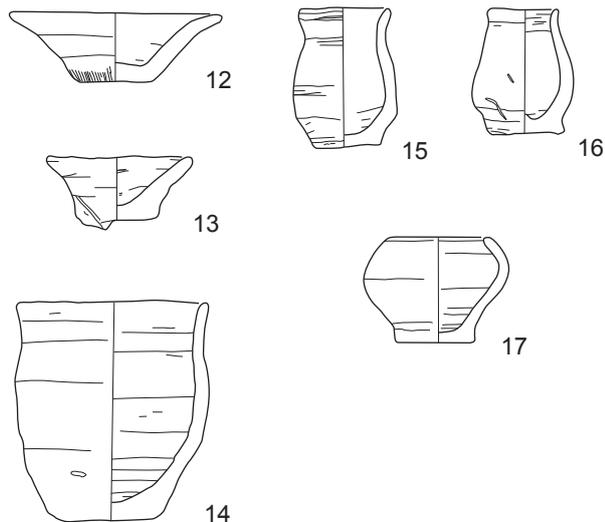
図 6. 12~17 はアビュドスのセンウセルト葬祭殿の周辺から出土したミニチュア土器群である (Wegner 2007: 253-285, Figs. 110, 114)。平底の皿形もしくは碗形 (図 6. 12、13) と、ピーカー形 (図 6. 14) が全体の 86% を占め



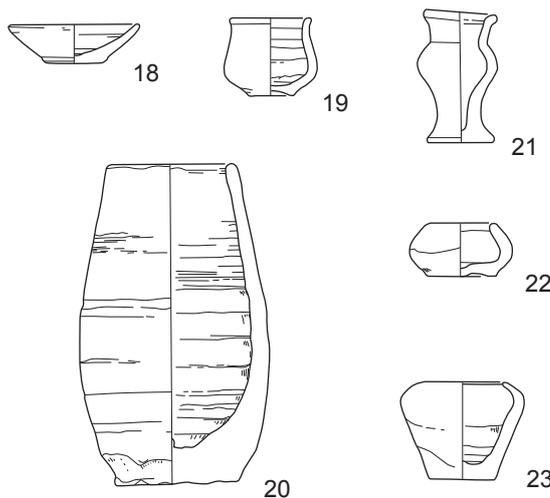
センウセルト 1 世葬祭殿



センウセルト 3 世葬祭殿 (ダハシュール)



センウセルト 3 世葬祭殿 (アビュドス)



アメンエムハト 3 世葬祭殿 (ダハシュール)



図 6 中王国時代のピラミッド葬祭殿出土ミニチュア土器

ていることは先に述べたが、それ以外の器形には、*nmst* 形 (図 6. 15)、*d&rt* 形 (図 6. 16)、*snw* 形 (図 6. 17) が含まれていることが分かる。

図 6. 18~23 はダハシュールのアメンエムハト 3 世葬祭殿の Keramikkomplex 6 から出土した土器群である (Do. Arnold 1982: 25-28, Abb. 6, 7)。平底皿形 (図 6. 18)、平底ビーカー形 (図 6. 20) に加え、*hs* 形 (図 6. 21)、*snw* 形 (図 6. 23) がある。図 6. 22 は埋葬におけるミニチュア土器の図 4. 9 と同じ形状であり、胴部に屈曲を持つ *d&rt* 形に近い器形である。また、図 6. 19 は口縁部が外反する形状から、*nmst* 形を意図していた可能性がある。

葬祭殿での祭祀に関連する土器群にはミニチュア土器が多いことは知られていたが、その器形について詳細に見てみると、*nmst* 形、*hs* 形、*snw* 形、*d&rt* 形など、埋葬のミニチュア土器の構成と良く似ていることが分かる。地上の日々の祭祀活動で使用された土器群は、地下の埋葬で使用された土器群よりも胎土が粗く、整形、器面調整なども簡略化されており、粗製であることが強調されてきた¹⁸⁾。しかし、器形において埋葬のミニチュア土器との類似が見られることから、日々の供物奉獻祭祀において使用していた土器のセットの選択には、副葬土器で看取された「単位」と同じような、古王国時代から続く供物奉獻の儀礼が背景にあった可能性が考えられるのである。

8. アブ・シール南丘陵遺跡の土器の廃棄堆積

次に、地上の供物奉獻祭祀活動で使用された土器のセットについて、より踏み込んだ分析を行ってみたい。

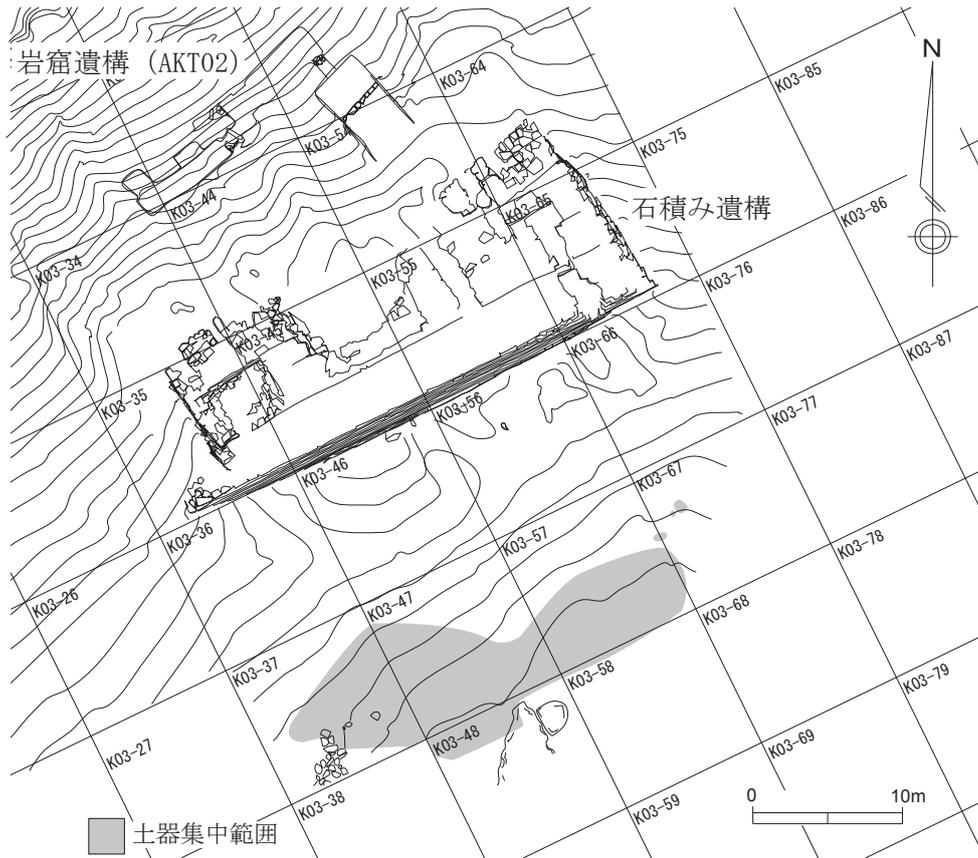
早稲田大学古代エジプト調査隊が発掘を行っているアブ・シール南丘陵遺跡では、丘陵の南東斜面より第 3 王朝の階段状ピラミッドあるいは層状ピラミッドと同じ築造技術で造られた石積み遺構が出土しており、その背後 (北側) の斜面からは 2 つの岩窟遺構 (AKT01、AKT02) が発見されている (図 7 上)。岩窟遺構の内部からは中王国時代の土器とともに陶製・土製のライオン女神の像や女性像などが出土した (吉村・近藤・長谷川他 2003: 35-41; 吉村・近藤・菊地他 2003: 16-26; Yoshimura et al. 2005: 365-397)。岩窟遺構からはピラミッド・ウェアの特徴を持つ土器が含まれており、器種組成も埋葬に用いられる土器群に類似していた (高橋 2007)。

石積み遺構の南側の堆積からは、中王国時代の大量の土器が密集して出土した (吉村・近藤・菊地他 2003: 17-19, Pls. 3-5; 吉村他 2004: 30-35, Figs. 13-15, Pl. 4-3, 4; 吉村他 2005: 21-25, 29-30, Fig. 15-1~5; 吉村他 2006: 23-29; 吉村他 2007: 33-35)。土器群は石積み遺構の南東に位置し、出土範囲は東西約 30 m、南北約 10 m に渡っている。土器は粗製で、焼成が良好でないものが多いという特徴がある。

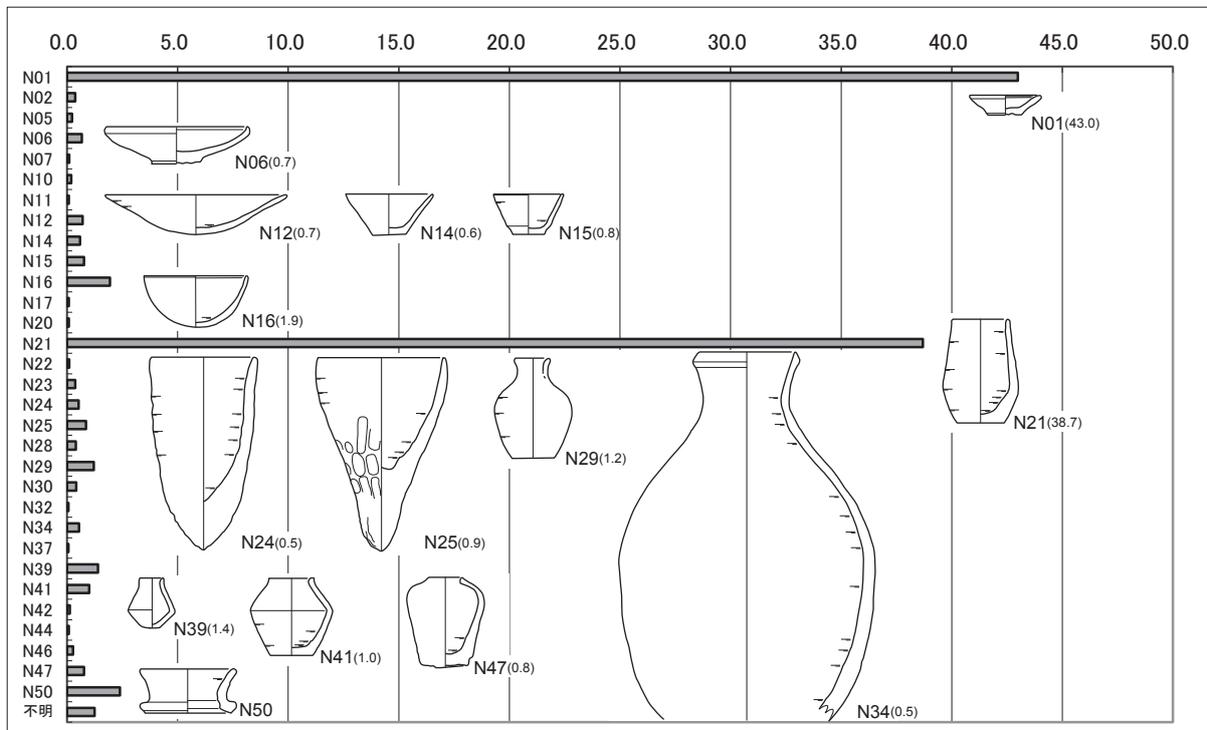
各器形の個体数を調査し、それぞれの器形が全体に占める割合を算出したところ、全体の 80% 以上がミニチュアの皿形とビーカー形に属していることがわかった (図 7 下)。これらの特徴はアビュドスのセンウセト 3 世葬祭殿の供物奉獻祭祀で使用された土器の廃棄堆積 (Cult Building Refuse Deposit) と極めて類似していた。アブ・シール南丘陵遺跡の土器の廃棄堆積も、葬祭殿のように定期的に供物を捧げる儀式が執り行われ、使用された土器が廃棄され続けた結果、出来上がったと考えられている (矢澤 2007: 50-51; Kawai et al. 2012: 160)。活動の時期は少なくとも第 12 王朝中期から第 13 王朝初期までの幅があり、最初期から最末期にかけて、土器が小型化し、整形が粗雑になっていくといった、製作における省略化傾向が認められている (矢澤 2008)。岩窟遺構からは神像群だけで人骨は出土していないが、ピラミッド・ウェアを含む王族の埋葬に類似した土器群が発見されており、その近傍に供物奉獻祭祀に伴う廃棄堆積があるという構成は、地下での埋葬と地上での死後の葬祭活動という埋葬習慣の一般的な組み合わせと、構造的に類似している。

図 7 下のグラフで、ミニチュアの皿形とビーカー形以外の残りの 20% 弱の器形に着目してみると、N14、N29、N39、N41、N47¹⁹⁾ は副葬品のミニチュア土器や、葬祭殿における供物奉獻祭祀に関連するミニチュア土器にも含まれていることがわかる。N14 は全面に赤色スリップが塗布され、軽い研磨調整が施されており、図 4. 4、5 に示したピラミッド・ウェアほど良質ではないものの、器形・表面調整ともに良く似ている。N01 (小型平底皿形) と N12 (小型ビーカー形) が突出して多く、この土器の集中を生む原因となった活動は極めて限定されていたと考えられることから、N1 と N12 以外の器形についても、ある程度の数が出土しているものに関しては、別の活動による混入ではなく 1 回の供物奉獻祭祀におけるセットの一部であった可能性がある。アブ・シール南丘陵遺跡が緑地帯から 1 km 離れた低位砂漠上にあり、周囲に同時代の活動の痕跡がないことも、他用途の土器が堆積へ混入していなかったと考える 1 つの根拠となり得る。

次に、供物奉獻における単位について、具体的な例を見てみたい。地上の土器群は密集して出土したが、その密度はどの場所でも均一だったわけではなく、いくつもの小さな土器の「まとまり」が積み重なっている様子が観察された。これらは廃棄における 1 回の単位を示している可能性があったが、土器群の「まとまり」は相互に近接していたため、これらを分割することが難しかった。しかし、わずかではあるが、土器の集中範囲から平面的にも、垂直的にも独立していた「まとまり」を特定することができた。本稿では、この独立した「まとまり」の土器群について見て



アブ・シール南丘陵南東斜面の中王国時代の土器集積



土器集積の各器形の出現頻度 (0.5% 以上は図を掲載、括弧内は割合)

図7 アブ・シール南丘陵遺跡南東斜面の土器集積の平面図と器形別の出現頻度のグラフ

いきたい。

表4に上記の独立した「まとまり」の器形組成と各器形の個体数、図8にこの「まとまり」を構成していた土器の器形を示した。注意しなければならないのは、この「まとまり」は単に1回の廃棄の単位であって、供物奉獻祭祀における1回の土器のセットではない可能性である。しかし、各器形の個体数を見ていくと、N01とN21が主でN01がとりわけ多く、それ以外の器形はわずかに1~2点という特徴がどの例においても共通しており、図7のグラフで示した全体のアセンブリッジに対する「約数」と言えるような構成になっていた。個体数は28~37という数値を示しており、わずか4例のためこれだけではその数に傾向を見出すことは難しい。しかし、ファウンデーション・デポジットの分析で、土器のセットの個体数が全体の83%は25~39の範囲に収まっていたことを考慮すると、この数値も決して偶然ではない可能性がある。

器形の構成を見てみると、N14とN39、N40は *dšrt*、N44は *nmst*、N47は *snw* とみることができる。またN29やN36、N42もファウンデーション・デポジットや、葬祭殿、副葬土器の中に含まれていた器形である。その他、N16の半球形碗、N34の大型丸底壺形はミニチュア土器の範疇には含まれないが、中王国時代の住居址、墓、葬祭殿の廃棄堆積に共通して出土する器形である²⁰⁾。

土器の集中本体の発掘調査では、ピーカー形、壺形の土器の中からは、黒色の泥塊が発見されており、何らかの内容物の残滓と推測されている。また炭化物が発見されており、皿形の土器(図7下のN06、N12、図8のN10)の中には焼成痕のあるものが多かったことから、儀式の中で焚香が行われていたと考えられている(吉村他 2005: 25,

2006: 23; Kawai et al. 2012: 158)。アビュドスのセンウセレト3世の葬祭殿でも、儀式の1ステップとして、焚香が行われていた可能性が指摘されている。アビュドスの堆積からは、径1.2~1.4 cmの未焼成の粘土球が発見されている。粘土球の表面には灰白色の炭化した付着物が表面にあり、粘土球そのものにも黒色の炭が認められた。球状の香は図像にも表現され、香を意味する *sntr* という言葉の決定詞にも球が描かれることから、この粘土球は焚香に使用されたと考えられている(Wegner 2000: 114-115, 2007: 256-257, note 8)。セネブティシの埋葬でも、大型の丸底皿形土器の上に125個の粘土球が発見されており、香の模造品と考えられている(Mace and Winlock 1916: 112)。

以上、土器の集中範囲から独立した小さな「まとまり」について見てきた。この「まとまり」は、器形組成や個体数から、アブ・シール南丘陵遺跡で営まれていた供物奉獻活動の1回の儀式で使用された土器のセットであった可能性が高い。そして、この「まとまり」に含まれている土器の器形組成や個体数、そしてそれに伴って出土する他の遺物は、副葬品やファウンデーション・デポジットで指摘された「単位」と類似する点が多いことが分かった。土器の集中全体の器形組成は葬祭殿での供物奉獻活動に関連する堆積の組成と極めて良く似ていることから、葬祭殿での供物奉獻においても、アブ・シール南丘陵遺跡で観察されたものと同じセットを使っていた可能性がある。

この遺跡では岩窟遺構(AKT01、AKT02)から発見された神像群を用いて何らかの儀礼行為が執り行われていた可能性が指摘されている。本稿の分析で明らかにした「まとまり」の土器の組成や量的側面に見られる特徴は、この遺構の性格や行われた儀礼を探る上で有用な材料となることが期待される。今後、他の出土遺物を組み合わせながら当時のアブ・シール南丘陵遺跡の活動について、考察を進めていく必要があるだろう。

表4 アブ・シール南丘陵遺跡の土器集積から独立して発見された土器群の器形別個体数

器形	AK13o379	AK13o383	AK14o123	AK14o124
N01	23	27	19	14
N10			1	
N12				2
N14	1	1		
N15		1		
N16			1	1
N21	3	3	4	10
N29			1	1
N30				1
N32			1	
N34				1
N36	1		1	
N39				2
N40				2
N42			1	
N44			1	1
N47				1
N49				1
合計	28	32	30	37

9. ミニチュア土器使用の「単位」に見られる共通性の背景

中王国時代のファウンデーション・デポジット、墓の副葬品、葬祭殿での供物奉獻祭祀などで使用されたミニチュア土器群には、器形や個体数において、共通する「単位」が存在する可能性をこれまで指摘してきた。異なるコンテキストであっても、同じ「単位」が共有されていたとすれば、それはなぜなのか。次に、「単位」の共通性の背景について考察を加えてみたい。

S. アレンによれば、埋葬室から出土する土器群は、小さな「グループ」に分割できる可能性があり、その「グループ」にはピラミッド・ウェアや *dšrt*、*nmst*、*snw* 形の容器が含まれている。この小さな「グループ」は、ピラミッド・テキストや供物リストにある供物を象徴したもの

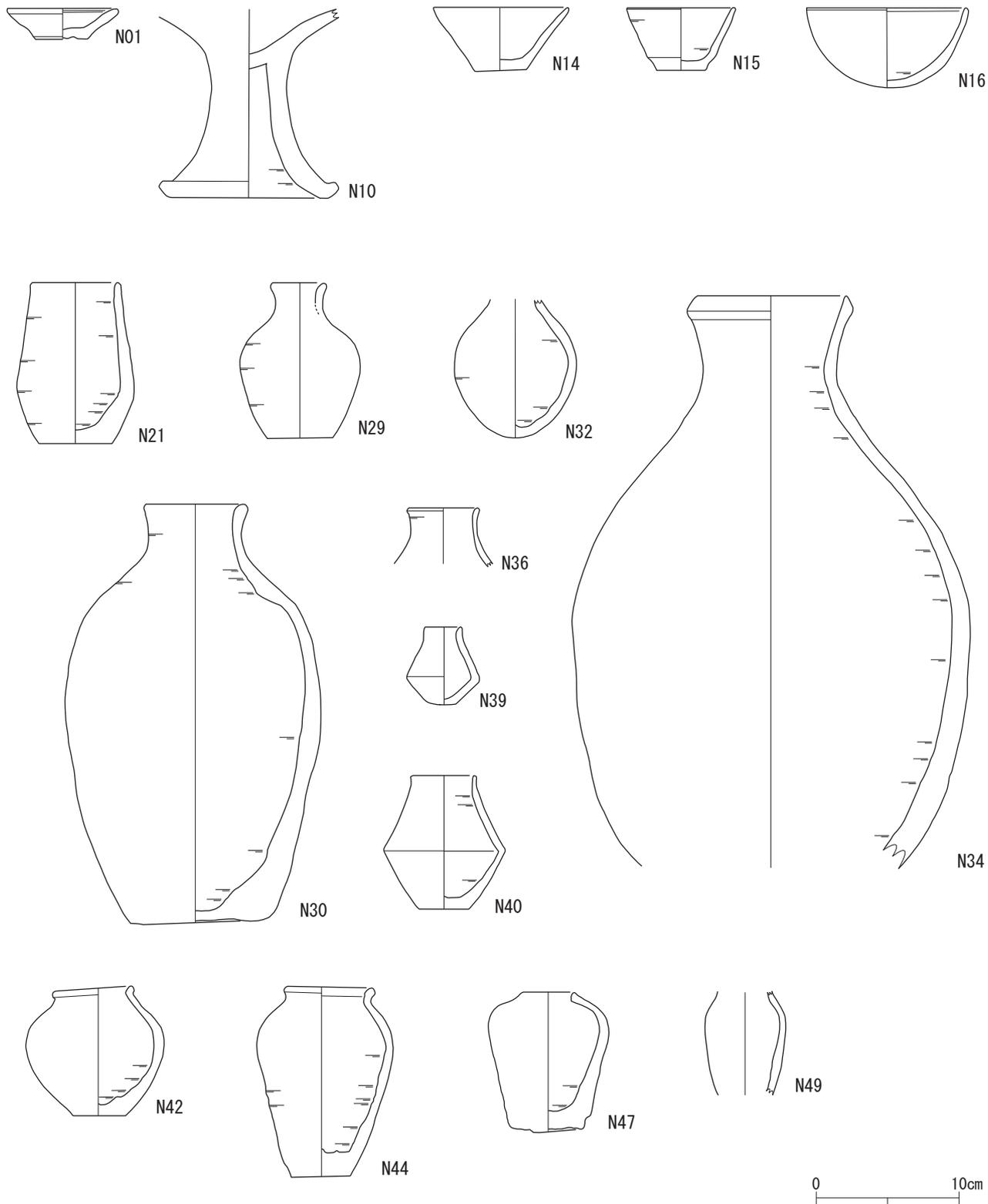


図8 アブ・シール南丘陵遺跡の土器集積から独立して発見された土器群の器形

であったという仮説をS. アレンは提示している。(Allen 2009: 335)。S. アレンは「グループ」の具体的な構成については触れていないが、本稿の分析では実際にヌブヘテブ

ティ墓、ネフェルウプタハ墓に副葬されたミニチュア土器の例を用いて、土器群が2つの「単位」に分割できることを示すことができた。副葬品のミニチュア土器群は各個体

が供物の代替物だっただけでなく、葬送儀礼にある一連の供物奉獻祭祀そのものを象徴しており、その組み合わせもまた重要だった。ミニチュア土器群の構成に「単位」が認められるのは、葬送儀礼との強い関連が背景にあると考えられる。

葬祭殿での供物奉獻で使用されたミニチュア土器群も、土器の質は異なるものの、器形には共通する要素が多く認められた。しかし、葬祭殿での供物奉獻は、被葬者の死後に日々繰り返される儀式であり、1回のみでの埋葬とは異なる活動のほうである。だが、葬祭殿や墓の礼拝施設に描かれた供物奉獻祭祀の図像・文字資料から、供物のセットの選択には同じ儀礼が存在していた可能性がある。墓の礼拝施設のレリーフや壁画で、被葬者とその前に供物が積み上げられているという一般的な構図は、古王国時代から新王国時代に至るまで、王族やエリート層の墓でよく見られる。このような供物奉獻の図は、礼拝施設内で実際に供物が捧げられる場所において描かれ、供物リストがこの図に組み込まれていることが多い。供物リストはピラミッド・テキストにある供物奉獻祭祀の抜粋であり、被葬者に対して毎日行われるべき供物奉獻の儀式そのものを描いていると考えられている (Hays 2010: 8)。H. ヘイズ (Hays) は、アブ・シールの第5王朝サフラー王のピラミッド複合体で発見されたレリーフに、ピラミッド・テキストにある供物奉獻の内容がすでに刻まれていたことから、第5王朝末のウナス (Wenis) 王のピラミッドの玄室に刻まれた碑文よりも、地上の葬祭施設で刻まれていた碑文の方が先行していたことを指摘している。そして、第5王朝末から玄室に刻まれるようになったピラミッド・テキストは、地上の葬祭殿においてそれより前から使用されていた文書のコピーであったとヘイズは述べている (Hays 2011: 119-120)。ピラミッド・テキストやその抜粋である供物リストが、もともとは地上での葬祭の儀礼から来ていたのであれば、葬祭殿での供物奉獻に使用されていた土器群が、副葬品の土器群と共通する器形であったとしてもおかしくはない。土器の質の違いについては、墓の中で永遠に埋納される1回限りのものと、使用される毎に廃棄されるという使用方の差異から来るものと考えられる。墓の中に入れられるものは永遠に機能しつづけることを意図しているため精製の土器を利用し、使用後廃棄されることを前提とした土器については、特定の器形を採用することでその象徴性を保持しつつも、胎土の準備や整形、焼成になるべく手間がかからない粗製の土器を利用することで²¹⁾、製作にかかるコストを下げていたのである。

ファウンデーション・デポジットにおけるミニチュア土器群の構成が、どのような典礼に則って選択されていたかについて、直接参考となる図像・碑文資料は見受けられな

い。供物に関連する間接的な資料として、アブ・シールのニウセルラー王の太陽神殿では、定礎の儀式を描いたとされるレリーフが発見されており、雄牛と鳥類の首が堅穴を表現したと思われるU字形の枠の中に描かれ、その傍に土器を捧げている王の姿があった (Bissing 1923: Pl. I. 2)。雄牛と鳥類の組み合わせは古代エジプトにおける供物奉獻の定型的な表現であり (cf. Leprohon 2001: 570)、中王国時代のファウンデーション・デポジットでも雄牛の頭や鳥類の動物骨は一般的な奉納品である (Weinstein 1973: 57-86)。また、末期王朝時代の例であるが、定礎の儀式の場面を描いたレリーフに、ワイン、ミルク、ビール、水の供物が言及されていた (Bissing and Kees 1922: Pl. I)。少なくとも、定礎の儀式には定型的な供物を伴うものであったことは確からしく、ミニチュア土器はその一部であった可能性が高い。

また、ベルリン・レザー・ロールにはセンウセレット1世の治世3年にヘリオポリスの太陽神殿で行われた定礎の儀式で、王の代わりに「朗唱神官長」(*hry-hbt hry-tp*) が「紐を張る」儀式を行ったという記録が残っている (de Buck 1938: 53, Pl. II)。「朗唱神官長」は神殿での祭祀や葬祭において呪文を唱え、儀式を執り行っていた高位の神官であり、伝統的な宗教文書を保護する役割も有していた (Doxey 2001: 69)。葬送儀礼を伝え、執り行う人物が定礎の儀式に関わっていた記録は、葬送儀礼と定礎の儀式との関連を見る上で重要な事実と言える。

土器そのものを見てみると、ファウンデーション・デポジットのミニチュア土器は、特に閉じた器形に関しては時期によって形が異なっているが、個体数が一定の傾向を示していたことから、ミニチュア土器のセットの背景となった思想は変化していなかった可能性が考えられる。副葬土器との類似は既往の研究でも指摘されており (Allen 2009: 322)、特にアビュドスで出土したセンウセレット3世時代のデポジットにはピラミッド・ウェアが含まれていたことから (Allen 2012: 195)、当時の副葬土器との強い関連がうかがえる。またミニチュア土器には内容物を伴って発見されることが多い。液体のものはその痕跡しか残されておらず、内容の特定にはいたっていないが、固形のものについてはナツメヤシ、ブドウ、イチジク、オオムギやパンの破片などが確認されている。これらは供物リストの中にも含まれているものである²²⁾。

副葬土器との類似や朗唱神官長の関与、供物リストに含まれる供物が共伴することから、ファウンデーション・デポジットの土器のセットにも、葬送における供物奉獻祭祀の影響があったのではないだろうか。ファウンデーション・デポジットは埋納後、二度と開けられないことが前提だったと思われる。その場合、密閉された場所であっても

永遠に供物が供給されるような、呪術的な仕組みが必要だったと考えられる。墓の副葬土器も求められていた機能は同じであり、こうした状況の類似から、副葬土器と同じセットを選択していた可能性が考えられる。葬送儀礼の継承に深く関わっていた朗唱神官長が定礎の儀式に参加していたことも、副葬土器や葬祭殿の供物奉獻祭祀のミニチュア土器と、ファウンデーション・デポジットのミニチュア土器を結びつけるのに一役買っていた可能性がある。だからこそ、ピラミッド・ウェアが王族の埋葬で使用されるようになったのと同時期に、ファウンデーション・デポジットでも同種の土器が埋納されるようになったのではないだろうか。このような前提に立つならば、アメンエムハト3世ピラミッド北東コーナーの土器群が93点あり、それまでの平均より圧倒的に多いという事実も、当時の副葬土器における個体数の増加 (Allen 1998: 44) と同じ流れに位置づけることができるだろう。

10. 予察：ミニチュア土器使用の「単位」と供物リストとの関係

ミニチュア土器使用の「単位」と、葬送儀礼にある供物奉獻祭祀との対応関係について、予察として最後に触れておきたい。

古王国時代のミニチュア容器のセットと供物リストとの対応について、H. ユンカーは一步踏み込んだ指摘を行っている。ミニチュアの石製容器のセットが概して80点前後で構成され、棺の傍に置かれるという特徴があり、器形の構成についても一定の傾向があったことから、ミニチュア容器のセットは同時代の供物リストを表現したものであるとユンカーは推測した。供物リストは墓やステラ、埋葬室に刻まれることによって、被葬者へ供物を捧げる者が絶えてしまった後も、死者への供物奉獻を永続させるためのものだった。ミニチュア石製容器はいわば3次元の供物リストとして、壁や石碑に刻まれるものと同じ役割を果たしていたとH. ユンカーは考えたのである (Junker 1929: 108-109; Do. Arnold 1999: 491)。

古王国時代でH. ユンカーが報告しているミニチュア容器のセットは80点前後であり、本稿で挙げた30数点という数値とは大きく異なる。W. バルタ (Barta) は供物リストのタイプ分類を行っており、古王国時代に墓やステラに刻まれた供物リストはタイプAに分類されている (Barta 1963: 12)。一方中王国時代では、最初期のメンチュヘテプ2世の段階から簡略化された供物リストが登場している (W. バルタのタイプC, Barta 1963: 111-116)。供物リストには、捧げる供物の名前と、その数が列挙されている。そして、リストには供物を入れる容器として *dsrt*, *nmst*, *snw* を指定している箇所がある。W. バルタによる

タイプCの集成を参考に、各供物リストに記載された数値の合計を並べたのが表5である。全部で12例、数は24~38の幅があり、平均値が31.25となる。各リストの供物の表記の仕方にはわずかなバリエーションがあるものの、内容や順序はほぼ同一である (Barta 1963: 116)。各供物の数については厳密に定められていたわけではなく、ある程度の自由が許容されていたようである。

今回の分析の結果明らかになった30~34点前後というセットの個体数と、タイプCの供物リストの値は近似している。ファウンデーション・デポジットの例でも個体数にばらつきがあったが、ミニチュア土器がW. バルタによるタイプCのリストを表していたと仮定した場合、その典拠となる供物リストの数値に幅があるのであれば、そのばらつきを反映しているとも見ることが出来る。

だが、中王国時代でもW. バルタの供物リストのタイプAは数多く描かれており (Barta 1963: 161-162)、タイプAの供物リストの元になった、ピラミッド・テキストも墓に刻まれていた (cf. Di. Arnold 2008: 22-23, pls. 21-22, 23a-b)。数値の近似だけから、ミニチュア土器使用の「単位」はW. バルタのタイプCの供物リストを参照していたと結論づけるのは、まだ早計と言えるだろう。今後は、本稿の分析の結果と図像・碑文資料を参考にしながら、ミニチュア土器と当時の供物との関連を幅広く見ていく必要がある。

11. 結論

中王国時代のファウンデーション・デポジット、墓の副葬品、供物奉獻活動に由来する廃棄堆積から出土したミニチュア土器について、使用における構成や規則性という観点からその傾向を見ていった結果、これらには共通する「単位」が存在していた可能性がある。そしてこの「単位」は、古王国時代から受け継がれた葬送儀礼の中にある供物奉獻祭祀と関連していたと考えられる。ミニチュア土器を供物奉獻に用いる場合、個々の器形や個体数はランダムに選ばれたものではなく、一定の規則に基づいた「組み合わせ」として使用することが重要であったと考えられる。

葬送儀礼の文書は、墓の内部においては来世での存続のために必要なものとして被葬者の傍に配され、地上においては儀式の場で唱えられる呪文の記録であり、墓の中の被葬者に対して永遠に有益な影響をもたらすものだった (Assmann 2005: 248-249; Hays 2011: 119-120)。ピラミッド・テキストに記された供物奉獻祭祀では、捧げるべき供物やその順序が決められており、供物リストはそれを表形式で記述したものである。儀礼としての性格から、供物が死者に対して有益なものとして機能するためには、儀礼にある項目を欠落なく、決められた順序で捧げることが重要

表5 中王国時代の供物リストと供物の数の合計

被葬者名	場所	供物の合計	参考文献
イピティ	ダハシュール	28	de Morgan 1895, Pl.XI
ネヘシトアuketネニ	ダハシュール	24	de Morgan 1895, p.39
サイセト	ダハシュール	32	de Morgan 1903, Pl.XIV
アメンエムハト	ベニ・ハサン	33	Newberry 1893, Pl.XVIII
アメンエムハト	ベニ・ハサン	32	Newberry 1893, Pl.XIX
アメンエムハト	ベニ・ハサン	32	Newberry 1893, Pl.XX
ネチエルネケト	ベニ・ハサン	38	Newberry 1893, Pl.XXIV
ネチエルネケト	ベニ・ハサン	30	Newberry 1893, Pl.XXIV
クヌムウヘテブ	ベニ・ハサン	36	Newberry 1893, Pl.XXXVI
ネケティ	アビュドス	30	Lange and Schäfer 1902, p.70
レメニアंक	アビュドス	31	Lange and Schäfer 1908, p.211
ヘブ	不明	29	Königliche Museen zu Berlin 1913, p158

だったと考えられる。ミニチュア土器が葬送儀礼に記された供物の代替物であるならば、土器の組み合わせそのものにも重要な意味があり、それが本稿の分析で観察された「単位」の背景にあると考えられるのである。

謝辞

本稿の資料を調査する段階から、早稲田大学吉村作治名誉教授、近藤二郎教授には多大なご教示をいただきました。アブ・シール南丘陵遺跡の現場主任、早稲田大学の河合望准教授には研究に関して数多くのアドバイスをいただいております。それは本稿の多くの部分に生かされております。またエジプト学研究所の諸先輩方からも数多くのご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。

本稿には平成24年度の笹川科学研究助成による研究成果が含まれております。

註

- 1) 土器に関する既往の研究・報告では「ミニチュア (Miniature)」や「モデル (Model)」という言葉はしばしば混同して使用されているが、S. アレンはこの2つを明確に区別している。「モデル (Model)」は完全に奉献用として容器としての機能を有しておらず、例えば外観は容器の形をしていても中には物を入れる空間がない石製容器などはこれに該当する。これに対して「ミニチュア (Miniature)」はスケールが縮小されていても、潜在的にはその機能を保持しているものを指す (Allen 2006: 20-21)。
- 2) メイドゥーム、ダハシュール、アブ・ロアシュ、アブ・グラブ、アブ・シール、サッカラ、ギザにおけるミニチュア土器の研究に関する文献は、S. アレンの論文を参照してもらいたい (Allen 2006: 22, note.28-34)。ギザのセントカウエスの葬祭複合体の東部 (KKT-East) で発見されたミニチュア土器については A. ヴォジンスカ (Wodzińska) の論文を参照 (Wodzińska 2013: 175-179, Figs.9, 10)。
- 3) J. ウェグナーの2000年の報告では平底の皿形・碗形の本本文中では「蓋もしくは奉献皿 (lids / "votive dishes")」と書かれているが、「蓋」としての考え方を優先しているためか、土器の図版およびグラフ上では口縁が下になる方向で掲載されている (Wegner 2000: 112, Fig.18.51-55, Fig.20)。しかし、2007年の報告書では、本文中には同様に蓋もしくは奉献皿として記述されているが、図の方は皿もしくは碗として口縁が上に向く形で掲載されており、見解に変更があったと思われる。本稿では、他の遺構でのミニチュア土器の使われ方や解釈から、これを皿形または碗形であるとする意見を取り入れた。
- 4) J. ウェグナーによる2000年の報告の Fig.8 ではミニチュア皿形

が24%、ピーカー形は62%と記載され合計では86%であり、2007年の報告でも文章では同様の数値になっているが、Fig.108のグラフでは皿形が15%程度、ピーカー形は40%となっており、一致していない。

- 5) 本稿では土器の大きさの基準として小型、中型、大型という言葉を使用する。これは Do. アーノルドによる土器のサイズの基準 (Do. Arnold 1988: 136) を参考にしており、土器の径もしくは器高で値の大きい方の数字から判断する。小型 (small) は15 cm以下、中型は15 cm~25 cm、大型は25 cm以上である。なお、本稿で使用する「ミニチュア」という言葉は、定義のところで述べているように、あくまで実物を模して縮小されているという「性質」を示すものである。土器の中でもとりわけ小さいものが多いことは確かだが、何 cm以下といったように具体的な数値によって示される「大きさ」を指しているわけではない。
- 6) 中王国時代におけるファウンデーション・デポジット出土土器の器形の変遷については、別項で詳細を報告している (矢澤 2013: 542-547)。
- 7) 古代エジプトの土器の胎土分類ではウィーン・システムが一般的に用いられている (Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。ピラミッド・ウェアの胎土はウィーン・システムの分類による Nile B1 のみで作られている (Allen 2012: 187)。
- 8) 全部で18例だが、アメンエムハト3世ピラミッドの北東コーナーのみ突出して高いため、これをはずれ値として除外し、ヒストグラムの階級数を決めるためにスタージェスの公式に当てはめた。17例の場合、値は5.0874...となるため、階級数は5が適当と判断し、15を起点として15~19、20~24、25~29、30~34、35~39の5つの階級を設定した。図3でははずれ値も同じヒストグラムの延長上に追記するため、90~94の階級のみ右端に表示した。
- 9) 表3の13例の内、7例 (イタ、ウェレットII、サトハトホル、センウセレット3世ピラミッド複合体 Tomb11の被葬者、ネフェルウプタハ、アウイブラー・ホル、ヌブヘテブティ) は王族の埋葬と考えられる。なお、アメリカ・メトロポリタン美術館によってセンウセレット3世のピラミッド複合体周辺の調査が近年進められており、王族の女性の埋葬が未盗掘のものも含めて発見されている。これらの土器の研究は主に S. アレンによって進められており、一部が論文または概要報告の形ですでに報告されているが (Allen 1998, 2000, 2009, 2012, 2013)、発掘報告書は未刊行であり、全容の公開には至っていない。本稿は2013年までに公開されている資料で分析を進めている。
- 10) 図4に記載した実測図の引用元は次の通りである。図4.1: ダハシュール北遺跡シャフト53、吉村他 2011, Fig.17.4、図4.2: ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホ

- ル墓、Allen 1998, Fig.2.9、図4.3：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.2.10、図4.4：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、ウェレトII墓、Allen 2009, Fig.6.5、図4.5：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド北、サトウェルト墓、Allen 2009, Fig.6.11、図4.6：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド北、サトウェルト墓、Allen 2009, Fig.6.15、図4.7：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.2.3、図4.8：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 2012, Fig.3.j、図4.9：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.2.12、図4.10：ハワラ・ネフェルウプタハ墓、Faraq and Iskander 1971, Pl.XIII.8、図4.11：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.2.4、図4.12：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、ウェレトII墓、Allen 2012, Fig.4.c、図4.13：ハワラ・ネフェルウプタハ墓、Faraq and Iskander 1971, Pl.XIII.6、図4.14：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、Tomb 11、Schiestl and Seiler 2012, no.IV.2.C.17.9、図4.15：ダハシュール北遺跡、Shaft 53、吉村他 2011, Fig.17.25、図4.16：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.2.13、図4.17：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、ウェレトII墓、Allen 2012, Fig.4.a、図4.18：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、Tomb 11、Allen 2012, Fig.3.h、図4.19：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、サトハトホル墓、Allen 1998, Fig.3.7、図4.20：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、ウェレトII墓、Allen 2012, Fig.4.b、図4.21：ダハシュール北遺跡シャフト53、吉村他 2011, Fig.17.18、図4.22：ダハシュール北遺跡シャフト53、吉村他 2011, Fig.17.21、図4.23：ダハシュール・センウセレット3世ピラミッド複合体、ウェレトII墓、Allen 2012, Fig.4.e。
- 11) 図像から *nmst* と *snw* 器形の判別をするのは難しい面もあり、新王国時代の例では全く同じ器形として描かれることもある (Do. Arnold 1984: 217-218)。G. ジェキエの集成は中王国時代のものであり、図像では確かに *nmst* は口径が広く短い頸部があって外反しているように見え、それに対して *snw* とされているものは口径が比較的狭く、頸部はほとんどなく口唇部が厚いように見え、両者に違いがあるように見受けられるため、本稿では S. アレンによる比定を採用した。
 - 12) セネプティシの埋葬の正確な年代や、どのような人物であったかについては議論が行われている。王族の埋葬と類似している点もあり、副葬品の質から見て、少なくとも当時の社会の中で高い地位にあった女性であることは間違いないとされている (Grajetzki 2014: 34-35)。
 - 13) 伸展した状態で左脇を下に向ける埋葬姿勢は、中王国時代の特に前半において一般的だが、後半にあたる第12王朝後半から第13王朝にかけては仰臥の姿勢が増えつつあった (Bourriau 2001)。しかし、棺の中で一対の目が描かれる場所は、第12王朝後半以後も同じだった。
 - 14) S. アレンによる 2009 年の報告では全個体数は最小で 260 点と記述されているが (Allen 2009: 327)、1998 年の報告では埋葬室から 25 点、付属室 (annex) から 100 点で合計 125 点と書かれていた (Allen 1998: 44)。本稿では新しい方の数字を記載している。
 - 15) J. de モルガン (Morgan) による報告書では表面の調整についての記述はないが、S. アレンは器形から、これらの土器群はピラミッド・ウェアと認定している (Allen 2012: 186, 194, Fig.2.c)。
 - 16) 図6に記載した実測図の引用元は次の通りである。図6.1：Do. Arnold 1988, Fig.63.19、図6.2：Do. Arnold 1988, Fig.64.13、図6.3：Do. Arnold 1988, Fig.64.9、図6.4：Do. Arnold 1988, Fig.66.14、図6.5：Do. Arnold 1988, Fig.72.2、図6.6：Do. Arnold 1988, Fig.72.7、図6.7：Allen 2000, Fig.4.8、図6.8：Allen 2000, Fig.4.4、図6.9：Allen 2000, Fig.4.5、図6.10：Allen 2000, Fig.4.9、図6.11：Allen 2000, Fig.4.10、図6.12：Wegner 2007, Fig.110.44、図6.13：Wegner 2007, Fig.110.45、図6.14：Wegner 2007, Fig.112.99、図6.15：Wegner 2007, Fig.112.96、図6.16：Wegner 2007, Fig.112.95、図6.17：Wegner 2007, Fig.112.91、図6.18：Do. Arnold 1982, Abb.6.18、図6.19：Do. Arnold 1982, Abb.6.20、図6.20：Do. Arnold 1982, Abb.7.3、図6.21：Do. Arnold 1982, Abb.6.16、図6.22：Do. Arnold 1982, Abb.6.19、図6.23：Do. Arnold 1982, Abb.6.17。
 - 17) ピラミッド・ウェアはウィーン・システムによる分類では Nile B1 が支配的だが、図6.8の例は Nile B2 であり、より粗い胎土で作られている。
 - 18) 例えばアビュドスのセンウセレット3世葬祭殿から出土したミニチュアの平底ビーカー形と平底皿形の土器については、「mass-produced roughware」と報告されている (Wegner 2007: 255)。古王国時代でも、地上での葬祭活動に伴う土器が粗製であることは指摘されている (Rzeuska 2006: 512-515)。
 - 19) アブ・シール南丘陵遺跡の中王国時代の土器廃棄堆積から出土した土器群は、古代エジプトの王朝時代で一般的なナイル・クレイとマール・クレイの2種に大別されている。ナイル・クレイのものは最初に N を付し、各器形に通し番号が付けられている。
 - 20) 半球形碗、大型丸底壺は生活の中で使用された土器であり、埋葬に特化されたものではないが、副葬品としても頻出する (Allen 2009: 320-321, Fig.1.3, 7)。葬祭殿での儀式に関連する遺跡からも数多く見られ、リシュトのセンウセレット1世葬祭殿 (Do. Arnold 1988: Table.2, Fig.65.1, 15, 17, 41a, Fig.67.25, 26)、アビュドスのセンウセレット3世葬祭殿 (Wegner 2007: Fig.108.11, 48, 49)、ダハシュールのセンウセレット3世葬祭殿 (Allen 2000: Fig.4.1-3, 6, 7)、アメンエムハト3世葬祭殿 (Do. Arnold 1982: Abb.6.13, Abb.7.11) でも発見されている。
 - 21) 供物奉獻祭祀に伴う堆積では大量の土器が集積していることから、日々の葬祭で使用していた土器は、儀式的後に捨てることが前提になっていたと考えられる。しかし、日用品の土器は毎日のように使用していても、容器は繰り返し利用されるように、供物奉獻祭祀においても容器を繰り返し利用することは可能だったはずである。ここでは深く踏み込まないが、一度儀式で使用した土器は、何らかの特別な属性がそのものに付与され、二度使用することができなくなるような呪術的思考があった可能性がある。J. G. フレイザー (Frazer) による「感染呪術 (Contagious Magic)」という概念 (Frazer 1920: 174-175) は、こうした思考と合致する部分がある。土器の質が低下はむしろ、廃棄されることが前提にあったからこそ起こったのではないだろうか。
 - 22) W. バルタの供物リストの集成 (Barta 1963) から確認できる。ナツメヤシ (p.122, 125, C19)、ブドウ (p.100, Nr.87, 88)、イチジク (p.49, Nr.71)、オオムギ (p.92, Nr.83)。パンには数多くの種類がある。

参考文献

Allen, S. 1998 Queens' Ware: Royal Funerary Pottery in the Middle King-

- dom. In C.J. Eyre, (ed.), *Proceedings of the 7th International Congress of Egyptologists, Cambridge, 3-9 September 1995, Orientalia Lovaniensia Analecta* 82, 39-48. Leuven, Peeters.
- Allen, S. 2000 Dahshur 1990-1995. *Bulletin de liaison du groupe international d'étude de la céramique égyptienne* 21: 43-49.
- Allen, S. 2006 Miniature and Model Vessel in Ancient Egypt. In M. Barta (ed.), *The Old Kingdom Art and Archaeology*, 19-24. Prague, Publishing House of the Academy of Sciences of the Czech Republic.
- Allen, S. 2009 Funerary Pottery in the Middle Kingdom: Archaism or Revival? In W. K. Simpson, J. Wegner and D. Silverman (eds.), *Archaism and Innovation: Studies in the Culture of Middle Kingdom Egypt*, 319-339. New Haven and Philadelphia, Yale Egyptological Seminar.
- Allen, S. 2012 Dahshur: Pyramid Ware. In R. Schistl and A. Seiler (eds.), *Middle Kingdom Pottery Handbook: Regional Edition*, 185-195. Vienna, Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Allen, S. 2013 Functional Aspects of Funerary Pottery: A Dialogue between Representation and Archaeological Evidence. In B. Bader and M. F. Ownby (eds.), *Functional Aspects of Egyptian Ceramics in their Archaeological Context: Proceedings of a Conference held at the McDonald Institute for Archaeological Research, Cambridge, July 24th - July 25th, 2009, Orientalia Lovaniensia Analecta* 217, 273-290. Leuven, Peeters.
- Arnold, Di. 1979 *The Temple of Mentuhotep at Deir el-Bahari*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Di. 1987 *Der Pyramidenbezirk des Königs Amenemhet III. in Dahschur, Band I Die Pyramide*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Arnold, Di. 1988 *The Pyramid of Senwosret I*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Di. 1992 *The Pyramid Complex of Senwosret I*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold Di. 1996 Two New Mastabas of the Twelfth Dynasty at Dahshur. *Egyptian Archaeology* 9: 23-25.
- Arnold Di. 2002 *The Pyramid Complex of Senwosret III at Dahshur: Architectural Studies*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Di. 2008 *Middle Kingdom Tomb Architecture at Lisht*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Do. 1982 Keramikbearbeitung in Dahshur 1967-1981. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 38: 25-65.
- Arnold, Do. 1984 Reinigungsgefäß. In W. Helck and E. Otto (eds.), *Lexikon der Ägyptologie* V, 214-219. Wiesbaden, Otto Harrassowitz Verlag.
- Arnold, Do. 1988 Pottery. In Di. Arnold, *The Pyramid of Senwosret I*, 106-146. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Arnold, Do. 1999 Thirty-two Miniature Vessels and a Table. In Do. Arnold, K. Grzymski and C. Ziegler (eds.), *Egyptian Art in the Age of the Pyramids*, 492-493. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Assman, J. 2005 *Death and Salvation in Ancient Egypt*. New York, Cornell University Press.
- Aston, D. 2004 *Tell el-Dab'a XII: A Corpus of Late Middle Kingdom and Second Intermediate Period Pottery*. Vienna, Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Ayrton, E. R., C. T. Currelly and A. E. P. Weigall 1904 *Abydos III*. London, Egypt Exploration Fund.
- Barta, M. 1995 Pottery Inventory and the Beginning of the IVth Dynasty. *Göttinger Miszellen* 149: 15-24.
- Barta, W. 1963 *Die altägyptische Opferliste von der Frühzeit bis zur griechischrömischen Epoche*. Berlin, Bruno Hessling.
- Bissing, F.W., 1923 *Das Re-Heiligtum des Königs Ne-Woser-Re (Rathures) vol. 2. Die Kleine Festdarstellung*. Berlin, Duncker.
- Bissing, F.W. and Kees, H. 1922 *Untersuchungen zu den Reliefs aus dem Re-Heiligtum des Rathures I*. Munich, Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- Bourriau, J. 1988 *Pharaohs and Mortals: Egyptian Art in the Middle Kingdom*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Bourriau, J. 2001 Change of Body Position in Egyptian Burials from the Mid XIIth Dynasty until the early XVIIIth Dynasty. In H. Willems (ed.), *Social Aspects of Funerary Culture in the Egyptian Old and Middle Kingdom: Proceedings of the International Symposium held at Leiden University 6-7 June, 1996, Orientalia Lovaniensia Analecta* 103, 1-20. Leuven, Peeters.
- de Buck, A. 1938 The Building Inscription of the Berlin Leather Roll. *Studia aegyptiaca I, Analecta orientalia* 17: 48-57.
- Doxey D. M. 2001 Priesthood. In D. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*. vol. 3, 68-73. Oxford, Oxford University Press.
- Engelbach, R. 1915 *Riqqeh and Memphis VI*. London, British School of Archaeology in Egypt.
- Engelbach, R. 1923 *Harageh*, London, British School of Archaeology in Egypt.
- Farag, N. and Z. Iskander 1971 *The Discovery of Neferwptah*. Cairo, General Organization for Government Printing Offices.
- Frazer, G. J. 1920 *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion Part I: The Magic Art and the Evolution of Kings*, Vol. 1(3rd edition). London, Macmillan and Co. Limited.
- Grajetzki, W. 2004 *Harageh: an Egyptian Burial Ground for the Rich around 1800BC*. London, Golden House Publications.
- Grajetzki, W. 2014 *Tomb Treasures of the Late Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Hays, H. 2010 Funerary Rituals (Pharaonic Period). In J. Dieleman and W. Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*. Los Angeles, University of California.
- Hays, H. 2011 The Death of the Democratization of the Afterlife. In N. Strudwick and H. Strudwick (eds.), *Old Kingdom, New Perspectives. Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC*, 115-130. Oxford, Oxford Books.
- Jéquier, G. 1921 *Les frises d'objets des sarcophages du Moyen Empire*. Le Caire, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Junker, H. 1929 *Giza I. Die Mastabas der IV. Dynastie auf dem Westfriedhof*. Vienna and Leipzig, Hölder-Pichler-Tempsky A.G.
- Kawai, N., K. Takahashi and K. Yazawa 2012 Middle Kingdom Pottery from the Waseda University Excavations at North Saqqara 2001-2003. In R. Schistl and A. Seiler (eds.), *Middle Kingdom Pottery Handbook: Regional Edition*, 147-160. Vienna, Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Königliche Museen zu Berlin 1913, *Aegyptische Inschriften aus den königlichen Museen zu Berlin I*. Leipzig, J. C. Hinriches'sche Buchhandlung.
- Lacovara, P. 1988 No.7. Set of Eighty Model Vessels. In S. D'Auria, P. Lacovara and C. Roehrig (eds.), *Mummies and Magic: The Funerary Arts of Ancient Egypt*, 77-78. Boston, Museum of Fine Arts.
- Lange, H. O. and U. Schäfer 1902 *Grab- und Denksteine des Mittleren Reichs im Museum von Kairo, Theil I*. Berlin, Reichsdruckerei.
- Lange, H. O. and U. Schäfer 1908 *Grab- und Denksteine des Mittleren Reichs im Museum von Kairo, Theil II*. Berlin, Reichsdruckerei.

- Leprohon, R. J. 2001 Offering. In D. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*. vol. 2, 564-572. Oxford, Oxford University Press.
- Mace, A. C. and H. E. Winlock 1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Meyer-Dietrich, E. 2010 Recitation, Speech Acts, and Declamation. In J. Dieleman und W. Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles, University of California.
- de Morgan, J. 1895 *Fouilles à Dahchour: Mars-Juin 1894*. Vienne, Adolphe Holzhausen.
- de Morgan, J. 1903 *Fouilles à Dahchour: 1894-1895*. Vienne, Adolphe Holzhausen.
- Newberry, P. E. 1893 *Beni Hasan, Part I*. London, K. Paul, Trench, Trübner & Co.
- Nordström, A. and J. Bourriau 1993 Ceramic Technology: Clays and Fabrics. In Do. Arnold and J. Bourriau (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, 168-182. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Pardey, E. M.- 1984 Scheingaben. In W. Helck and E. Otto (eds.), *Lexikon der Ägyptologie* V, 560-563. Wiesbaden, Otto Harrassowitz Verlag.
- Petrie, W. M. F., G. Brunton and M. A. Murray 1923 *Lahun II*. London, British School of Archaeology in Egypt.
- Petrie, W. M. F., G. A. Wainwright and E. Mackay 1912 *The Labyrinth, Gizeh and Mazghuneh*. London, British School of Archaeology in Egypt.
- Podvin, J.-L. 2000 Position du mobilier funéraire dans les tombes égyptiennes privées du Moyen Empire. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 56: 277-334.
- Raven, M. 2012 *Egyptian Magic: The Quest for Thoth's Book of Secrets*. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.
- Reisner, G. A. and W. S. Smith 1955 *A History of the Giza Necropolis. Vol. 2, The Tomb of Hetep-Heres the Mother of Cheops: A Study of Egyptian Civilization in the Old Kingdom*. Cambridge, Harvard University Press.
- Rzeuska, T. 2006 *Saqqara II: Pottery of the late Old Kingdom Funerary Pottery and Burial Customs*. Warsaw, Editions Neriton.
- Schäfer, H. 1908 *Priestergräber und andere Grabfunde vom Ende des alten Reiches bis zur Griechischen Zeit vom Totentempel des Ne-user-rê*. Leipzig, J. C. Hinrichs.
- Swain, S. 1995 The Use of Model Objects as Predynastic Egyptian Grave Goods: An Ancient Origin for an Dynastic Tradition. In S. Campbell & A. Green (eds.), *The Archaeology of Death in the Ancient Near East*, 35-37. Oxford, Oxbow Books.
- Wegner, J. 2000 The Organization of the Temple *Nfr-K3* of Senwosret III at Abydos. *Ägypten und Levante* X: 83-125.
- Wegner, J. 2007 The Mortuary Temple of Senwosret III at Abydos. New Haven and Philadelphia, Yale Egyptological Seminar.
- Weinstein, J. M. 1973 *Foundation deposits in ancient Egypt*, Dissertation in University of Pennsylvania.
- Weinstein, J. M. 2001 Foundation Deposits. In D. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*. vol. 1, 559-561. Oxford, Oxford University Press.
- Willems, H. 1988 *Chests of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom, Standard Class Coffins*. Leiden, Ex Oriente Lux.
- Wodzińska, A. 2013 Domestic and Votive Pottery from Giza. A View from Heit el-Ghurab Settlement and Khentkawes Town. In B. Bader and M. F. Ownby (eds.), *Functional Aspects of Egyptian Ceramics in their Archaeological Context: Proceedings of a Conference held at the McDonald Institute for Archaeological Research, Cambridge, July 24th - July 25th, 2009, Orientalia Lovaniensia Analecta* 217, 165-184. Leuven, Peeters.
- Yoshimura, S., N. Kawai and H. Kashiwagi 2005 A Sacred Hillside at Northwest Saqqara: A Preliminary Report on the Excavation 2001-2003. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 61: 357-398.
- 高橋寿光 2007 「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡岩窟遺構出土の中王国時代の土器に関する一考察」『西アジア考古学』8号 115-130 項。
- 矢澤 健 2007 「アブ・シール南丘陵遺跡、石積み遺構南側堆積から出土した土器群について」『エジプト学研究』14号 40-56 頁。
- 矢澤 健 2008 「エジプト中王国時代の祭祀土器の廃棄堆積について—アブ・シール南丘陵遺跡の例とその時間的変化—」『西アジア考古学』9号 119-130 項。
- 矢澤 健 2013 「エジプト中王国時代のファウンダーション・デポジットのミニチュア土器について」吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会(編)『永遠に生きる—吉村作治先生古稀記念論文集』539-552 項 中央公論美術出版。
- 吉村作治・馬場匡浩・近藤二郎・西本真一・柏木裕之・矢澤 健 2010 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第12次・第13次発掘調査—」『エジプト学研究』16号 5-46 項。
- 吉村作治・近藤二郎・菊地敬夫・河合 望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊7号 11-28 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・長谷川 奏・河合 望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊6号 11-44 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合 望・西坂朗子・中川 武・柏木裕之・長谷川 奏・菊地敬夫 2004 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊8号 20-50 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合 望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤 健 2005 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊9号 13-34 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合 望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤 健 2006 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊10号 19-43 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合 望・柏木裕之・西坂朗子・高橋寿光・矢澤 健 2007 「発掘調査概要」『エジプト学研究』別冊11号 33-58 頁。
- 吉村作治・近藤二郎・長谷川 奏・矢澤 健・柏木裕之・秋山淑子 2011 「Ⅱ. 第14次調査概要」『エジプト学研究』別冊15号 15-60 項。

矢澤 健
早稲田大学エジプト学研究所
Ken YAZAWA
Institute of Egyptology,
Waseda University